大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和十五年十二月一日發行
第十七卷第十二號（毎月一回一日發行）

柳川雜誌

月刊

主宰
★
麻生路郎

12

★最高權威の月刊柳誌

川柳雜誌 十二月號目次

表紙……（大）……福井哲
川柳宮眞……大西八歩……福井哲……（二）

★

路郎雜筆……麻生路郎……（一）
愚談……小畑自由朗……（二）
川柳イタリヤ小史……戸田孤蓬……（三）
高原吟……吉川風付……（四）
愛篇川柳蚯蚓……小畑自由朗……（三）
訪編（句）……布施筑川……（五）
武玉川四篇研究（二）……梅本塵山 蛭子東魚……（八）
未知の弔問……小山文三……（七）
狸……（後）……蒲田五健……（一〇）
平穏村雜記……蛭子省二……（一二）
貝釦……岡田茉人……（七）
一問一答…………（一四）
川柳横町…………（一六）

★

近作柳樽……麻生路郎選……（一三）
川柳塔……麻生路郎選……（一四）
同舟近詠……諸家……（一六）
西園寺公を悼む……麻生路郎……（一一）
杉原太研子
一路句集……黒川紫香……（一一）
各地柳壇……（一七）
柳界展望……（一八）
川柳協……（一九）
後記……（二〇）
社關係の人々……（二〇）

★兵士は戰線に！ 我等は銃後に！

待望の

戸田孤蓬氏著

川柳 二千六百年史

出づ!!

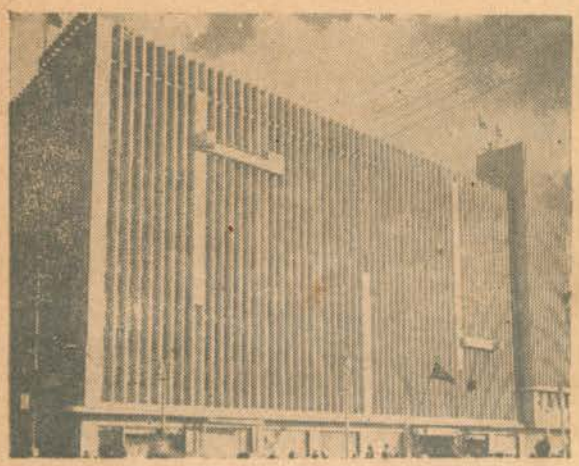
序・題字
麻生路郎先生
本庄榮治郎博士
宮本芦根高商教授

著者はその序文の劈頭に於て、「科學としての歴史は虚心坦懐に客觀を踏み外す譯には行かない。史論となるとその客觀を基礎として筆者の全人格が縱横に批判を試る。史劇乃至歴史小説は骨だけを史實に求めてあらゆる人生の相をそこに描き出さんとする。詠史川柳に至つては史論と史劇の中間を歩みつゝ詩を汲み上げ汲み取らんとする」と述べて詠史川柳に對する態度を明らかにしてゐる。

★從來詠史川柳の或集編纂が、本書の如く著者にして神代から現代までを詠出した例はない。その點、本書は著の劃期的な試みを柳壇的に宣揚すべきではなからうか。川柳人並びに愛史家の一讀を薦む。

定價九拾錢（送料六錢）

堺市出島海岸通三丁目一八二
發行所 不朽洞
振替大阪三〇三九二



物價國策に協力する
銃後百貨店「そごう」

大阪 そごう

急告

★歳末恒例の「同情週間師走川柳大會」を本年は休會いたします。

★本大會は尤も有意義な年中行事として好評を博し、逐年盛大に擧行され、本年は京阪神外の各地からも、陸續として來援の報に接して居りましたので協會側としても遂を強くし、早くから其の準備に着手しつゝありましたが、新體制下に於ける諸種の事情から愼重協議の結果、取止めにした次第であります。深謝なる御聲援をたまはつてゐた會員の御諒承をお願ひいたします。

★本協會主催の「同情週間師走川柳大會」は取止めになりましたが、川柳雜誌社主催の「師走川柳大會」が來る十二月十四日に、本協會後援の下に擧行されますので、その方への御協賛を特にお願ひ申上げます（本誌三頁記事廣告參照）

川柳人協會
理事長 麻生路郎

麻生路郎★主宰 川柳雑誌 Pensoj flugas trans la land-limon

西園寺公の薨去は皇紀二千六百年のビリオドかも知れない。

日本國民は崇つて故人の祖國愛に萬謝していゝだらう。合掌

西園寺公を悼む

折も折大番頭に亡くなられ
坐漁莊の名殘に富士もくもりしか
沼津へはもう特急も停まるまい
園公のことよ興津の鯛の鯛
プラットにもう鳩杖の見られぬ日

麻生路郎

路郎居漫筆

廢物惡用

★廢物利用といふ言葉がある以上、廢物惡用といふ言葉もあり得るのではないか。

★見るもの觸はるものを、悉く廢物利用の眼で見、廢物利用？をしなければおさまらない物癖い何んとか夫人もゐれば、それが利用の域を脱してゐても、チッとも御存じのない方もある。

★亡くなつた厨川白村は廢物利用嫌ひで廢物利用の家へ行くと、ハガキの古いのやバットの空函で、茶壜敷や肘突が出來てゐたり、蝙蝠傘の柄が衣紋竿に姿を變へたり、まるで化物屋敷だと酷評をして笑はしたものだ。

★それは尤も、平時の話で、非常時では化物屋敷然としても多少忍ばねばならないが、それにしても物資愛護の意味を履き違へて、廢物惡用？をしてゐるのを見るとなさけない氣がする。

★物資愛護の意味なら、**織物になる紙屑を篩き寄せる**の程度で、いゝのではあるまいか。篩き寄せた紙屑を是が非でも自分で廢物利用を考へ出さねばならないのでは、奥様が奥様の仕事をせずに、拾ひ屋の仕事を奪ふことになる。新聞の家庭欄であつたか、家庭に屑籠を五つほど設けて、鐵屑や空罐や、硝子の缺けや、布切や、同じく布切でも、綿と羊毛とに區別して、それ〳〵の籠に入れて賣ればいゝと云ふやうなことが書いてあつたが、今の主婦に、そこまでやれる暇があるか、どうか。たとへ暇があつても、そんな暇をもつと有益な仕事に振り向けるべきではなからうか。資源愛護が大切なら人的愛護はもつと大切でならねばならぬ。

★青砥藤綱が、滑川へ落した一文を拾ふのに十文？の松明を焚いたといふ話は、天下の通寶を愛護するためには己の經濟的損失は問題でないと云つたそうであるが、消費した松明は矢張り天下の資源であることを忘れた説で、この點、藤綱の頭を訂正する必要があらう。

★近ごろ、川柳人もなか〳〵物資愛護、廢物利用に頭を使つてゐられるらしいが、程度を越した廢物惡用？に陷らないやうに注意されたいものだ。一例を擧げると、

近ごろ、投句其他に封筒の裏返しを二重三重に利用されてゐる向きが殖えて來たが、如何に廢物利用とは云へ、文字が鮮明に讀み下せることと、代用品程度の形容は存して貰ひたい。見ても汚ならしい封書であつたり、古新聞古雜誌で作つたために、文字が不鮮明であつたり、形が特に小さかつたり、型破りの變形であつたりしては、いろ〳〵の手違ひを生じ易く、折角通信の目的を達しない場合もある。

社の雜誌を送つた封筒を利用して投句された方の投句が、社へ配達されずに、發信者へ舞ひ戻つた例もある。なるほど、よく見れば社名の下に御中の文字が書かれてゐるが、多忙な配達夫の仕事を考へる時そうした誤達を、責める譯には行くまい。汚損した封筒や、古新聞などを利用した封筒だと、ずつと以前に來た郵便物と間違へられる處れがないとは云へぬ。投句用紙も、その書き方も常識の範圍であることが必要で、その人にとつての廢物利用？が、投句の整理係、選者、編輯者、印刷屋の文選係に、必要以上の勞苦を與へるとしたら、自己の句を尊重する意味で、廢物利用程度の廢物利用であることが、相互の利益であると思ふ。

★近來、郵便物の配達に遲着、誤達の多くなつて來たことは甚だ遺憾であるが、一面廢物惡用？程度の郵便物が、その能率を幾分でも低下させてゐるとすれば、發信者側でも留意する必要があらうと思ふ。

「バット」から「光」へ

★何處かの雜誌に、僕が「バット」を一日に十函も喫ふやうなことが書いてあつたが、アレは嘘だ。バット一本喫うのに、五分かかるので百本も喫つたら大變だ。しかし、新聞にゐたころには七つから八つは必ず喫つてゐたのでポケットとふポケットには皆バットが入れてあつた。無意識に手を突ッ込んでもバットが摑めた譯だ。私のバットは仕事にホットしした時に喫うのでなくて、汽車を走らすのに石炭を焚くやうなものだ。それほど私は仕事をしながら、話をしながら喫うのである。

★その「バット」を二タ月ほど前からピタリと廢めた——と云つて禁煙したのではない。「光」に轉向したのである。バットに對して多少の愛惜がないでもなかつたが、近ごろでは、スッカリ「光」黨になつてしまつた。

★バット階級といふ言葉が生れたほどに、バットはインテリ階級や勤勞階級から支持され、愛用されてゐたので、常に不足勝ちで、タバコ屋の店頭から幾度無駄な踵を返へしたか知れなかつた。それでもバットを廢して他の兩切を喫ふ氣にはならなかつた。

★値上げをしたが、私等は何んの不平もなくついて行つた。私たちの嗜好は信仰に近いまでにすすんでゐたからである。

★ゴールデンバットが金色を棄てゝ黄色なバットになつた。一寸ニセのバットのやうな氣がしたが、矢張り喫ひ續けた。吹ひ口が無くなつて函が小さくなつたが、バットから離れる氣はまだしなかつた。私たちは何處までもその嗜好を癇疾した。

★が、バットの函がヘラ〳〵の紙袋に變へられた時には何故だか、ガッカリした。バットの外觀からうけた魅力は完全に消滅して、多少嫌惡の感を懷いた。

★次に來たものは、バットの火が立消えて、一本のバットを喫うのに、幾本ものマッチを要することであつた。そして立消えてからのバットの不味さと來たら堪えられなかつた。

★某新聞記者が專賣局を訪づれ、某販賣課長に、そのことを訴へたところが、立消える？そんなことがあるものですか、品質は少しも落ちて居りませんといふ答へであつたが、そう云ひながら、喫つた課長のバットも又立消えてゐたといふ新聞記事があらはれた。

★それでも、まだバットを喫つてゐたが、遂に嗜好の轉向を餘儀なくされるところまで來たのである。

★近ごろのタバコ屋の店頭に、如何に多くのバットが堆積されてゐるかはタバコを喫はぬ人たちさへ氣づくほどである。

★バットを再度値上げすることの困難な理由のうなづけないこともないが——物資愛護時代にバットの堆積をしてまで、バットの嗜好者を光へ轉向させることが果して國策に副ふ所以なのであらうか。

★明治初年には士族の商賣といふ言葉があり、その後、役人の商賣といふ言葉が生れた。專賣局の役人がそれだとは云はないが、近ごろのタバコ屋の店頭から影を沒した「光」、曾てのバットと同じ現象を繰返してゐるところを見ると、「光」の前途が案じられてならない。

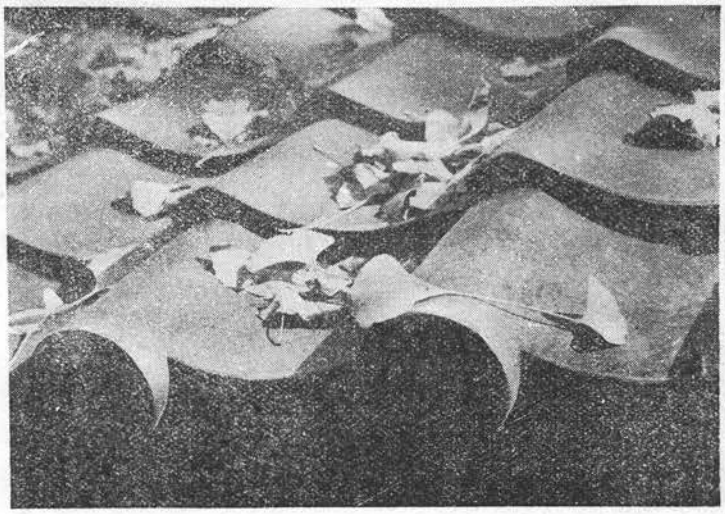
★「バット」が「金鵄」と名を變へて見たところ、所詮は**傾城も淋しくなると名を變へる**の類に過ぎないであらう。

★私はバットを詠んだ川柳をボツ〳〵蒐めてゐるので、他日「バット考」を發表したいと思つてゐる。

★今後、「光」が「バット」に代つて、どれだけ句にあらはれるか、興味をもつて眺めて居やう。

（路郎）

國産の王座
ムッソリーニペン
●何故ムッソリーニペンは優秀！
書きよい……すぐれた技術で造られるから
錆びない……完全に鍍金を施してあるから
强い……撰りすぐつた材料を使ふから
廉價……良品で大量生産をするから



祖母の死を悼みて

散つてからの高さ見直されて　（八歩）

カメラ　福井哲

川柳　掌篇

蚯蚓

小畑自由朗

親父が中風で倒ほれたとの知らせに、伴が吃驚して大阪から駈け戻つて見ると、母親までが持病の喘息で、共に枕を竝べて唸つて居た。

生れて此の方二十五年、まだ孝行をしたおぼえのない伴は、「石塔にやふとん着せられへんけに喃」と、叔母にひにくられても、

「そらさうだす」と、心から頭が下つた。

「何んぞ」と、伴は孝行の手始めに、「喰べて見やうと思ひなはる物ンおまへんか」と、歎願する樣に云つた、

「何がお前」と、親父は、廻り兼ねる舌で、「わしやこうして、お前のたつしやな顔が見られたのが、何よりのごちさうぢやい」と滿足さうに云ふのだつた。

然し母親は「わしや、お前が其の歳になつてもまだ、世帶もやう持たんと、ふら〳〵して居るのが情け無うて」と、何時もの樣に愚痴るのだつた。

「すんまへん」男兒志を立て鄕關を出てから十數年、伴は今更ながら自分の不甲斐なさが骨身に泌みる思ひがした。

「此ん度こそは」と伴が聲を改めた。「あんた等が良うなりはれ

祝日獨伊同盟

柳川イタリヤ小史

戸田孤蓬

（一）概觀

ドイツ史に比べるとイタリヤ史は遙に複雜で、ローマ史を含めるとか含めないとか。とに角長靴型の此國土はズッと都市、小邦に分立して、其間に近代伊太利王國がそろ〳〵と出來上つて行く。それで此處でも通說に從つてローマ史を別の機會に讓る。アーリヤ種ラテン系の民族

廣き野に立てば國境みんな見え
國と國隣り組ほど親まず
途分ける色鉛筆が足らぬほど
旅券持たずに一寸出歩けず
俺が俺がと羅馬史奪ひ合ひ

（二）起源

紀元四七六西ローマは傭兵の大將オドワケルによつて滅され、その亦オドワケルは東ゴート王テオドリツクに殺され、テオドリツクの死後は東ローマに屬す。しかし間もなくロンバルト族が侵入。一方ローマ法王は世の中がどう變らうと精神界に君臨。遂にフランク王國のカロル大帝の勢力を此地に導入して、大帝の長子ロテールがイタリーの淵源を作る。さあれ統一とは名のみ相異らず群雄割據は繰返され、古代文化の末裔は日毎夜毎傭兵と云ふ戰爭業者に雙方の先棒を擔がせる。但しその戰ひ振りは、

傭兵賣見ずにうつかり死ねません
ロケーションみたいに終る大戰さ
よく〳〵の運のない奴討死し

（三）文藝復興

中世、十字軍遠征が行はれるや、法王お膝元のイタリヤは却て冷靜に、カン〳〵になつて突進して行くドイツ、フランスの英雄達を獲物の多い渡り鳥と嘲笑する程チヤツカリ儲ける事にかゝつた。ヴェニス、フローレンス等の町が榮え出し、そこから暗黑時代を清算する文藝復興が——ダンテの神曲は黎明の曙光の如く現る。マルコポーロの東方見聞錄に黃金國ジパングの魅力が書かれると、矢も盾もたまらずコロンブスはアメリカを發見して仕舞ふ。ミケランジエロやダウインチの聖畫は法王のバチカン宮をいやが上にも有難いものにする。ことにダウインチは飛行術をも憧れた大科學者でもある。

十字軍樣へヴエニスの商人等
簿記臺を離れずシヤイロツクぬる
ダウインチの憧れ鳥の骨ゐ描き
ばちあたりどもにダンテは取卷かれ

（四）ナポレオン時代

群小國家群に加へた最初の壓力はフランスであつた。フランスが出るとスペインが出る。此勝敗が選ばれた騎士の一騎打ですんだとは如何にもロマンチツクな話。其後四千萬フランで佛蘭西へ手離したコルシカ島から大英雄ナポレオンが出現。ナポレオンは遠征の手はじめにアルプスを越えてロンバルジヤにせまる。今の伊王室の祖であるサルジニヤ王國は侵入者と輕く和解。三色旗のイタリヤ共和國が出來上る。イタリヤ王やナポリ王をお手盛で製造する。ナポレオンの素張らしい征服慾は血の氣の多いイタリヤ人を刺戟して民族統一の願望を抱かせる。

一騎打負けて全軍廻れ右
ナポレオンを一寸眞似てもみたくなり

（五）伊太利統一

サルジニヤのエマヌエレ王は「イタリヤ・ファラー・タ・ゼ」（伊太利は自分で自分の事をする）とモツトーをかゝげて墺太利の羈絆から脫せんとする。志士マツチニー等の活躍した第壹回の墺伊戰爭である。之は敗け名宰相カブールの言により間もなく起つたクリミヤ戰爭には英佛側に立つてイタリヤの存在を宣傳し、第貳回の墺伊戰爭ではナポレオン三世と提携してよく墺軍を破つたが、水は血よりも薄く途中で勝手に和睦されてしまつて一寸恨みもしたものだが、英主エヌエレ二世の聲望は靜かに統一への步度を早める

第一回の獨立戰爭以來活躍したものにガルバルヂーが居る。ナポリを主とする南部イタリヤがまだ統一に參じて居ない。そのナポリに反亂が起るや彼は率然立つて之を征服。之を國王に献ず。更に宿望のローマ侵入をも企てたが、ナポレオン三世の

文兒童化宣傳
映畫
16ミリ 35ミリ トーキーとサイレント
製作・發賣・配給
大阪市東區南本町二丁目四五番地
深田商會映畫部
電話船場㊀四四四一—四四四三

次第、きつと嫁をもろうて身を固めまつさかいに」と、誓ふ樣に云つた。

「きうかい」親父は嬉しさうにうなづいた、

「でもお前は、あんまりふら〳〵仕過るちうて、村では評判者ンに成つとるけに」と母親が溜息をついた、

「そんならそれで、何んにも村の奴等をもらはんならんことはありやせん」と、親父が怒る樣に云つた。

「さうだすとも」と伴もひよいと意地に成つた「これでもあんた、大阪にや一人や二人の心當りもないことはおまへんねやさかいに」「えゝッー」母親が吃驚して咳き入つた。

「ほんまけい」親父は嬉しさうに起き上ろうとした。

「まあ〳〵」伴はあわてた、あわてた伴の胸一杯に、自分の働いて居る新聞販賣店の天井の蜘蛛の巣がもつれ〳〵てひろがつた。

こらいかん、伴は其れを振り拂う樣にして立上つた、

「それでお前」と、咳を納めた母親が、ふとんの中からせり出して來樣とする氣配に、

「まあ其んなことはどうでもよろしがな」と、伴は無理に顏をしかめて「そんなことよりもあんた、うんと滋養分とりなはつて一日も早う良うなりなはらな損だすがな」と逃れる樣に土間へ下りて行つて「せやさかいにかしわでも買うて來まつさかいに、うんと飯を喰ひなはれ飯を」と、家の外へ出て行つて、財布を覗いて永い〳〵思案の末、ほつと大きな溜息を一ツ、屋根裏から釣竿を下ろして悄然として蚯蚓をほり始めた。（完）

獨訪

布施筑川

梅田驛頭の感
驛頭は家族師の顏友の顏
滯獨　雜吟
雷公か空襲か夜半の響（ねと）
ジユセドルフ市の空襲
村に今夜も來たか英ボンベ
（ボンベとは爆彈の事）
曉鐘の頃の空襲
明け六つにあらで高射の響なり
伯林夜襲に照明彈を恐る〳〵見だる時
照明空命懸けにて見物し
ライン川の舟
洋々とラインは平和に流れてる
クロツス教授山莊の妻子を訪ふとて吾人とライン川を同舟
山莊の妻子訪づる羨し
伯林ウイルヒヨーラグンンベツク講堂に立ちて
夢想だにせぬ伯林の講演を
壇上一揖もう伯林子呑んじまひ
淸々し拍手を聞いて壇を降り
國賓の禮としてのホテル屋上の日章旗を拜して
國賓の禮ありがたし皇國の恩
ヘンボンと全市壓すか日章旗
吾人に供せられた旭旗高き自動車にての全旅行
六千キロ旭旗ひらめき走りたり
歸途シベリヤの白樺全山紅葉せるを
夕陽に朱毛氈は古けれど
ハネツルをシベリヤの野に見てシベリヤにハネツルべ見た懷しさ

外交政策にひつかかつて叛軍の汚名を受け、身亦傷き流刑に逢ふ。あたかも薩南の月を見る大西郷を思はしめる。

南部イタリヤの合併でエマヌエレ王は遂に伊太利王となり。後ヴネチアをも服し、法王はそのまゝにしてローマ入りもする事が出來た。

だんまりと云ふも技巧の一つなり
毀譽褒貶だまつて月の海を見る

(六)獨墺伊同盟

熱血兒は平靜になると血のはけ場に困る。統一完成後のイタリヤは又昔の群小國家群に戻らうとする。大量の南北アメリカ殖民をしたのもこの時代。だが突然のフランスのチユニス占領は國家的緊張を取戻して墺獨と三國同盟を結ぶ。立ちおくれたイタリヤはアフリカに殖民地を求め、エチオピヤと戰ひ、アドワの大敗を喫しもしたが、エリトリヤ、トリポリ、キレナイカ等をその手中におさめる事が出來た。

血のはけ場求めて海を渡るなり
後引けばエチオピヤにもなめられる

(七)第一次歐洲大戰

三國同盟は結んだものゝ、怪しからんのはフランスでなくオーストリヤと云ふ樣なことになつて大分熱がさめてゐる。その矢先セルビヤとオーストラリヤがボンとやりはじめた。勢ひそれと腰を上げかね、一年目に聯合國側に立つ事になつた。伊太利軍決して弱くなく、只地味な役を受持つたので華々しい場面を見せずして大戰を終る。結果の分け前も知れたもの。むしろ澎湃として押しよせる赤化の波に押しつぶされそうになる。

ちと長い洞が峠を右に降りし
勝つてみたけれど貧乏變りなし

(八)ムツソリニー

詩人ダヌンチヨの熱血の叫びはフツアシヨの源となる。忽然とそのあとに現れたのが我がドー・チエ・ムツソリニー。永年の對法王廳の問題を解決し、つゞいてエチオピアを征服。伊國王を以てその皇帝とする。赤禍根絶の爲めには身を鴻毛の輕きに比し、遂に日獨ともに防共戰士を以て任じ、第二次歐洲大戰起るや獨伊樞軸は緊密に舊體制の變革に邁進し。更に來るべき世界新秩序建設のために日獨伊同盟を締結するに至つた。

黑シヤツとペンと血で書く死の勝利
地中海先づ血祭はエチオピヤ
ムツソリニー羅馬の地圖を手離さず

——終——

師走川柳大會

主催　川柳雜誌社
後援　柳川會

★日時　十二月十四日夜五時半（土）
★會場　御津八幡宮（電話南八六四〇）南區八幡町佐野屋橋筋角（木棉橋電停下車東一丁）
★兼題　「忠義」（三句）……綠雨選
「炭俵」（三句）……鮎美選
「早駕」（三句）……豆秋選
★席題　締切當夜七時
★柳話　四題
「川柳から觀た忠臣藏」……廊生路郎
「假名手本雜感」……岡田某人
★會費　四七錢
★呈賞　四十七氏に贈る
★撮影
幹事　司會　田中風葉

★新體制が叫ばれてから、はじめての十二月です。苦い顏をして見たところで、どうなるものですか。忙しがつて見たところで、どうなるものですか。それはそれとして人間いきぬき必要です。一寸朗らかな句會をやる事にしました。行かうか行くまいかと考へたりしないで、アツサリお出掛けください。

★師走と云へば、臣道實踐の標本みたいな赤穗の浪士が思ひ出されるではありませんか。そこで歲末句會を義士回顧に因んだ明朗句會にして二千六百一年を迎へやうといふ趣向です。少しばかり機密を漏洩して見ませう

★兼題も席題もすべて忠臣藏張りでゆきます。開會日時が極月の十四日であることは云ふまでもありません。先づ先着四十七氏に蕎麥を出して、討入を回顧いたします。賞品は？勿論出します。それも義士の數だけ、四十七氏に……講演もあります。餘興は？どうだか判りません。會費も四十七錢です。これ以上は防諜關係上で申上げられません

★出席者の一人々々が幹事のつもりで早くから來てください。

★地方の方は早駕で出句のこと。この駕賃も四十七錢です。切手を同封されてもよろしい。

川柳塔

‖路郎選‖

栗の木にのぼり原始と子を思ふ
番小屋の外でカンテキ風情あり
街へ出て鬚の稲荷の神主さん

横濱　福田山雨樓

徳壽丸で櫻川不水氏と語る

玄海を乘り切る男赫ら顏
妓生の憎らしく云ふ日本語

兵庫縣　奥村丹路

批判癖捨ててまづ起つ床の上
憂愁の顏を仔犬に見上げられ

D氏に捧ぐ

子を死なし昭和維新の名もよけれ

有馬賴寧伯放送一句

この秋を義理人情に言及び
蟋蟀のやつぱり石の下で死に
耳朶と言ふできすぎたものふたつ
薄化粧して奉公の絣着る
醉ざめの水も思へば分に過ぎ
行儀萬端心得て候姉藝者
人妻の挨拶あはれゆきとどき
恩人へわが子をちさく座らしめ
趣味うつりかはり野菜の美しさ

兵庫縣　寺井鋭々

日本人なら新體制わかる筈
職域奉公女性自轉車にも乘つて
隣保班長ではなくて風呂で遇ひ
隣組國債買ふに氣が揃ひ
塀の枯蔦へピアノ急調

布哇　高澤一浪

せびられてやるのも男たる誇
年下の人を手本にするあそび
通る妓の後姿に口をあけ
午前二時女に財布のぞかれる
チブス入りでも贈手のあつてほし
永住をする氣にあらず義理を缺く
すきだらけだから人氣のある女
特種に公德心が邪魔をする
無論あるですよとトラの女給くる
百弗のチップ女給の狽てやう
まつすぐに歸つて損をした心地

大阪　戸田孤篷

時局論どどのつまりはくらし向き
七・七禁令せめて象牙史でも書こう
親に似て派手に算術違へて來

兵庫縣　戸倉普天

窓際につき出しサヨナラ言はせてる
連れられて行く妓の目立つ此戰時
目立つ服裝控へるために買ふ芦屋
モンペイが嫁入道具となつて來る

龜知山　小畑自由朗

三等車に英靈を迎ふ

英靈へタイ米の話ちよん切られ
英靈へ一合壜も仕舞はれる
英靈へ赤ン坊も乳でおさえられ
此の車窓英靈兵として征きし日よ

久し振りで鄕里へ歸る

友みんな褪せてしなびて禿げかかり
新體制次期の村議へ出んと云う
歸る度村醫の家は建て增され
秀才の木挽きさつぱりわやと云う
思出の川はやつぱりせせらぎつ
初戀だしたと初戀も笑ひ出し
吾禿を指す初戀も前齒なく

犬捕り街に現はる

犬捕りの助手買つて出た尋常科

大阪府高石町　米本貴志子

白菊の白さに衿を正したり

入院雜

入院に肩身のせまい肥りやう
病院に二度目の月が圓うなり
春風の樣な看護婦脈を取り
御守を名醫拜んでそつとのけ

大阪　橋本綠雨

大念佛にて十一月六日夜

法燈に犬の遠聲聞えて來
奉仕團鍬のもちかたまで教へ
もたされた鎌やくたたぬ左利き

大阪　高橋かほる

十二月大根下ろしが殘るだけ
十二月又前だれを踏んで立ち
慰問品の買ひ物に來て無口なる
體育祭高い所に寫眞班
好男子美男子銀行にゐて事務をとり
★
褒めてやればとんぼ返へりもして見せる
贅澤な刺身のこした夜もあつた
まな板のくぼみ頑固に耐へてゐる
歸還してからも班長受けがよく
常會へ後れた詫びは作業服
あれ淀川ですよ頻張る握り飯

無烟炭ドベ(洗炭の沈澱物)にタドン作成

タドン作る夫婦見かはし笑ひたり

大阪　清水史路

皇紀二千六百年奉祝式典

ヒットラーよとこの萬歲を聞いてゐか

大阪　清水白柳子

一億の聲を神々聞き給ひ

翠香氏轉業さる

父祖の業ああ明日からの淋しさよ

大阪　中内芳翠

夕煙立つは我家畦を行く
山彦がうれしい子等と下りる谷

下關　多田市多樓

儀禮章キツチリ時計を合せて出
塗りかへて驛新年を待つばかり
經濟論女なか〳〵負けてゐず
少年へ不幸な交通事故が起き

下關　濱田賢次

ノーチツブ財布安心して見せる
軍服を着ると男をみなをされ
トランクへ同情をして發車せず
世界地圖ぬりかへられん日も近し
タバコの輪風がかはつたなと思ひ

廣島　大森風來子

亡母の三回忌墓參

母の聲がする聲がする秋芒
引越へあきれ果てたる空マツチ
紅一點にお茶をくませるひとが居る
二階の窓へ植木を置いて誰を待つ
旅先でマツチを拾ふとはうれし
どん底にゐて漫才に似る笑ひ
金齒を見てから受付むつとする
紅一點が笑ふのを待つてゐるカメラ

兵庫縣　水谷鮎美

無帽主義ラヂオ體操はお好きです
茶の味に母と座る日の善き心
まごころのすりへりたるも十二月
丹前で着ぶくれてみる新年號

徳島縣穴吹町　姫田夕鐘

せちがらひお米なるぞへ群雀
月が出て滿作へ風の音ばかり

桑園へ雲隱れたのが尿をたれ

御輿のまぶさ國策の色でなし
柿の木へ猿の我が子を見てゐたり

大歩危探勝

大歩危の奇勝野猿が馬鹿にする

大阪　市場沒食子

人妻と云ふを電髮わすれかけ
蛔虫の仕業と醫者も氣がつかず

S君歸還

戰線三千里馳驅たと見えぬ優男
空地利用子供の遊ぶとこが減り
節米の折柄此處の犬公方
小兒科のみんながみんな子供好き

大阪府柏原町　宮岡白峯

炭燒が戀しくなつて街にゐる
秋の山淋しく人を吸ひ込んだ
百圓札ではと車掌に降される
日記帳今年は物價高も書き

松本　石曾根民郎

伊勢神宮にて

五十鈴川生き合ふひとの歩みなる

橿原神宮にて　二句

遠つ祖に額く旅を秋の晝

無冠王君の案内

京に友あり名所こそ多すぎし

大阪　正本水客

懸崖の菊へ本家の無人勝ち
裕福な人に新藥教へられ
集金にゆけば畑の手を洗ひ
雜巾が干からびてゐる寂しさよ
荷造りを二號夫人に頼まれる
婦人科へくるは餘つ程もめたあと
途ですむことに名案などはなし

豊中　黑川紫香

大平洋太陽も出る月も出る
閑地利用夫人やうやく土に馴れ

稻刈りへ聲をかけかけ來る役場
釣同志話あうてる高い雲
看護婦の口調變らず待たされる
女には課長も別な聲となり
別莊の大きさを見る坂となり
野菊にも風は無情なものとなり

大阪　丸尾潮花

總力戰男なんぞに頼らない
倖な膝で琴爪もてあそび
妻ある日子供に近い無理も云ふ
夫婦きり暮す助役へ鷄頭咲く

出雲大社にて

大社御禮參りの背がぬくし
松風をまともに受けた大社

神戸　岡田某人

文化映畫主客仲よきまま別る
家業無事繼がれて古き硯箱
賣られてゆく牛よお前も參か
謀叛とやかなしき人の夢の跡
まき餌までしてカワハゲが一つ釣れ
海の宿本當の天の河が見え

尼崎　酒井斗風

ユダの血をうけしか今日も檢擧さる
神話語れば子の眸輝やきぬ
宗教書買うて子供とコーヒのむ
四十代近し理想を日々崩す
この街のよさに長男次男生み
幸福なひとの素直さほほえまれ
校庭の落葉をこども掌にうける
善後策さて金のないものばかり

大阪　北川春巣

於　三朝温泉（三句）

傷兵の列湯の街を引緊める
湯の町を見下ろす安樂椅子が鳴り
湯の宿の情緒の一つ雨になり
式の日が迫り高砂やをさらへ
毛のうすいのが毛のうすいのを見付け

同舟近詠

三人の父なり白髪放つとかう
がらくたを時價に見積りあきれたり

下關　櫻川不水

米國

鐵のがれ組は酒場で踊りぬき
忘れませうなどと健氣に立ちあがり
日本の女だ強く生きてくれ

廣島　濱田久米雄

横槍に筋が通つてゐる強さ
股火鉢急病人へあわてない
いい月夜人の情に泣く夜なり
子が直ぐに覺えた隣組の歌

病院船日本の山をささやかれ
活け終るまでを姉妹話さない

大阪　魚住滿潮

金貸の殺されもせず十二月
有餘る家の債券當つてゐ
死んでもよい扱ひされて日向にゐ
年内に拂へときつい葉書來る
南支から尋ねてくれる十二月
インチキが判るまで捺して歸へるなり
矢印は腦病院の方を指し
腦病院定員超過してるなり
爵位返上ものの解つたお殿様
默禱の足もと鳩は餌を拾ひ

掛取と掛取冬の陽にしやがみ
今日まではどうにか來たが掌をみつめ
六法全書僕の理窟は通らない
冬時雨乞食が位置を變へるなり
米を買ふ悲しき拾圓札となりぬ
賴母子の親で自分の名も書けず
よい夢をみてゐるとこへ訃の報せ
香奠の話障子へ朝が來る
親類がたらふく呑んで皆歸へり

大阪　北山悟郎

早く治しモ一度征くゾの顔斗り
ぼくが仇討つと次男も三男も

菊に手を伸ばす子抱いて遠く佇ち
菊持てばモンペ姿もイヽ姿

松山　前田五健

奥様が姓で呼ばれるモンペ隊
モンペはく日なり主人の子を守る日
頭髪の油がキツイ此の野郎
問答無用新體制でありますぞ
節米普及犬の事猫の事
佳年奉祝感恩の眼を膝に
佳年奉祝しき紙へ罎をたつぷりと
炭燒の聞けば名譽の歸還兵

兵庫縣御影町　長崎柳秀

思慕秘めた女の文字の美しさ
新婚の旅にはむごい驛がこみ
さからはぬ妻の情が物たらず
子が一人ほしい夜長の妻の顔

一匹の蠅にいらだつ大男
親馬鹿の馬鹿に馬鹿ではなり切れず
新體制產めよ殖せの切符制

神戸　潮田明坊

長男を叱り飛ばして淋しがり
内氣また相手の聲に氣を呑まれ
すつたもんだで決めたのに雨が降り
工場の一隅看護婦もつとめ
高架下柱のわきで柿を賣り
深い〳〵眠り我が家我が蒲團

今治　長野文庫

長女自轉車に乘るを覺ゆ

拍手してやり度い吾子ペタルに踏む
佛印の山水も知る勝いくさ
あきないの他に思案の要る世相
利子で食ふ人が指揮する隣組
春秋に富むと書かれて肺で死に
無駄廢除足元暗き拔け路次
カフェーの孤影悄然壁剝げて
商權とかは陽の前の雪に似し
捨つべきは面子か業か未だ迷ひ

淑髪ウエーヴは
大阪・心齋橋筋周防町角
ナショナルへ
山口倫子
經營
電南992

釦貝

（續）

岡田某人

あゝ、消えて行つたもくろみの數々。これがみな實現してゐたなら。

※

椿のかげの面影は
おもしろや
椿のかげにかくれたり
椿のかげの面影は
はかなしや
椿のかげのまぼろしか
椿のかげの面影は
あなやあな
椿のかげになほもあり

※

やき立てのパン。日向の匂ひがする。

※

詩魂滅びず。……それで苦勞をするのですて。

※

花は咲いてゐる時に見るものさ。——刹那主義

あゝこの花も、やがてはしほれて散るのだが。——苦勞性

もうこの盆栽も咲き相なものだが。——こいつが一番わいせつだ。

※

醉ひつぶれるべし。さもなくば飲むべからず。第一不經濟である。

※

遠距離遞減法。——やがてロハになつてしまひ相な氣をさせる。一種のインチキである。

※

足の水虫をていねいに舐めてくれる犬。さてその腹の中は如何相成つたか。

※

一個五錢の卵からかへつたひよこ——一つ三錢。

※

ひよこ——ついて來る、ついて來る。

※

御出迎へ。御見送り。子供ぢやあるまいし、いやはや。儀禮とはそんなもんぢやない。

※

放つといて呉れる人が一番親しい。

※

空を見よ。空を見てゐて惡いことを考へるやうな奴は、眠つてゐても惡いことを考へてゐるにちがひない。

※

仰向いてゐて考へることゝ、うつ向いてゐて考へる事との間のちがひ。この、二つの頸のまげ方によつて何か分泌に影響があるのではないか。

未知の弔問

小山文三

紀元二千六百年の初秋、私の父は菊の盛りを見ないで眠るが如くに天壽を全うして逝いた。

友人、知己、親族等の熱情あふるゝ弔問に接して今更ながら涙を新にしたものであつたが、就中和歌、俳句、川柳など趣味の士の弔歌、弔句に對しては一人心引かるゝものがあつて、感泣を禁じ得なかつた。——處が……

○

弔電を頂いた中に發信人の氏名が書いて無いのが數通もあつたのには全く困らせられた。發信局名で見込をつけて住所錄を探して見ても、それらしいのが見當らなかつたり時には見込をつける人達が同地方に數名あつたりするので、止むなく一々受信局から發信局に電報で照會して貰つたりして確かめたのであつたが、これ等は概ね、せわしい人達が給仕や屬僚に命じて打電させたものらしいと思はるゝ向に多かつた。畢竟人任せにする事は兎角間違の起り易いものだと痛感させられた。

○

戰地から香奠を郵送して下さつたが其大部分が下關局からの軍事支拂票であつたから、これだけでは誰が送つて下さつたのやら判らなくて、後から來る手紙でぼつ〳〵判つて來た。

○

こんな時に凡そ未知、未見の人から弔問を受ける位、氣持の惡い事はない。

信州長野の佛教○○會の名を以て御丁寧な弔問狀が屆いた。そして別便で善光寺○○○公染筆の謄寫に成る南無阿彌陀佛の小さな一軸を贈つて來たが、二三日後に「御思召で良いからいくらかの會費を寄贈して呉れ」との申越であつたのには驚いた、新聞の死亡廣告と長野の善光寺を利用した一種の商策だと判つて見れば一向有難味もないのであつた。

○

私の宗旨とは全然關係のない紀州の○○山○○院、同××院から供養をするから戒名を通知せよとのしば〳〵の御勸に接したので、或は亡父が存命中に此院に參詣した事があるのかも知れないと考へたので、試に戒名を通知して置いたら、折返して「何々院殿無事御入山あり、毎日回向申し上げて居る」との沙汰があつて御供物を郵送して來たのがある。

やがて思召の回向料の寄進を勸めて來るのであらうと密に好奇心を以て待つてゐるのである。

○

幡洲の某寺の若い雲水僧から突然未熟な筆蹟の手紙が來た、曰く

自分は四歳で母に別れ、兩三年前父を亡ひ兄姉もない天涯飛獨の十八歳の若僧で今は某院主に救はれて佛の道に精進してゐる。而して其父の祥月命日に相當する日に淨土に入つた人達、三千三百名の法名を集めて永く父の供養をするを念願としてゐるが今日迄に貳百六十餘名の法名を集め得たが此念願を達成するためには未知、未見の方々にも御援助を願はなければならないので甚だぶしつけながら法名を知らせてほしい。

と、言ふのである。そして鳩居堂製の香を送つてくれたりするのであつた。

果して私の亡父が其子の父と道連れになつて極樂淨土を辿る事を好むか、好まないかは判らないが、あまりの熱情あふるゝ手紙だつたのでこちらの法號を通知して置いたが、丁寧な感謝狀が來たのみで別に回向料の仰付もなかつた。これなどは父戀しさの一念から若い血に燃えた孝心の發露であらう。

○

父の忌明が濟んだ頃に生命保險の勸誘員が新規契約を奬めに來て呉れるのもウルサイ事の一つであつた。勸誘員自身にして見れば只自身の職業意識を働かせたつもりでゐるだけの事ながら、こちらでは涙未だ乾かず、保險の事など考へても居ないのだから隨分嫌な思ひがした。

○

信託會社は中々拔目がなくて愈忌明の濟んだ頃に、相續稅引當金の信託だの、遺産の信託預金だのをいとも丁重な弔問狀と共に勸めて來るのであつた。

こんなに未知の先からいろ〳〵申越されては却てこちらで腹を探られてゐる樣な心地がして少々嫌な氣持になるのであつた。これなども新聞の死亡廣告の齎す、職業意識の惡用だと思ふ。

○

味噌の味噌臭きは上等の味噌ではないと同じ樣にあまり氣のつき過ぎる職業意識の濃いのも、全く鼻摘みものであらう。

（昭和一五—一〇—三〇、車中稿）

武玉川四編研究（十三）

梅本塵山
森東魚
蛭子省二

(315)

大津まて來て蘇生る人

東魚＝道中を苦しみぬいて來たが、もう一と呼吸で京都へ入るといふ、大津迄ついて、ほつと蘇生した氣になつたのであらう。（或は京都から逃れ出る人が、逢坂の關を越して、ほつとしたと云ふのか、何れであらうか。）

塵山＝京上りでなく、東下りであらう。牛若丸がその一例である。

省二＝此句も亦どちらにも解し得る。「蘇生る」を時間的に短いものと、文字通りに解すれば、東下りとなる。

(316)

はたちの後家の心には聟

省二＝二十では、常に心に思つて居るのも尤だ。『二十の思案閨に及ばず』（武・初）。

東魚＝十九の厄に、夫を失つたのであらう。

塵山＝剪つた髪を伸ばし、薄化粧もするに到る。

(317)

千兩箱に手こたへはなし

東魚＝大抵費用が懸ると云つても、千兩箱にこたえる程の物入りは、仲々有るものではないと、千兩といふ金の偉大さを、かう詠んだのであらう。

塵山＝千兩箱の中に小判でも有るかと、蓋を明けてさぐつてみたらば、全然空虛であつて、何の手答へも無いとの意かと思ふ。

省二＝前兩解のいづれかであらう。一トロに千兩といふが、『千兩の裏は未だにつけ手なし』で、一箱で大門がうてたと云ふから、大した價値だと思ふ。さう手答のする金ではなささうだ。――句をもう少し、ひねくつて考へてみると、『金づくでそるもの江戸にやありんせん』で、千兩箱位では手答がないのかもしれぬ。

(318)

南になつて妻の鉢巻

省二＝判らぬ。姙娠か。出産か。

東魚＝南風になつて、イヤに暖く女に有勝ちの、のぼせ血の道の工合で、鉢巻をするとであらう。

塵山＝自分なども南風の吹く日は、輕く頭痛がするので、前說が正しいのである。

省二＝いかにも御尤である。私の考へ過ぎであつた。「鉢巻」を餘り大ゲサに感じたので『女護の島吹かぬにはなし不二南』で「日本の方に向ひて帶をとき風をうくれば懷胎してまた女子を產む」（風流志道軒傳）に當てはめてみたので之れは島風俗であつた。頭痛鉢巻といふ言葉があつたのだつた。

(570)

『舟軍たらけの來たる南かせ』參考句だ「南風をくつた飴細工のやう」とか「南風にあつた海月のやう」といふ俚諺さへある。だらけかかる程暖いのだ。

(319)

元結こき若菜の上を飛て行

東魚＝元結こきは、廣い空地などで、仕事をした樣であるから、萠え出た若菜を踏まぬやうに飛んで、立ち振舞ふと、春めく氣分を描出したものであらうか。

塵山＝若草ならば聞えるけれども、若菜では畑のやうで、少し事實に違ひはせぬ歟。

省二＝句意は東魚氏說の通りと思ふ。確に若草なれば最も明瞭だ。（若菜畑は俳諧の季題となる。）。元結こきの仕事場に、「若菜」と限つた事には、無理が伴ふ氣がする。若菜が出てゐるので、そこ丈けをまたぎ越してはといふ一ツの感じに、元結こきを結びつけた技巧。文七に踏まるな蝸牛の流儀でもあらう。

(320)

目の明く度に淀の人聟

省二＝淀川舟行路點景。

東魚＝川筋の寄る所々で、其都度目がさめる趣であらう。（淀川船は何處と何處へ、寄つたのか詳かにしないが。）

塵山＝淀の川船は、枚方へ暫時停止する外には、停船せぬやうである。

省二＝私が八月「川柳雜誌」社を訪問し、同志と膝を交へた際、淀川舟行に一言した事から、本誌第二〇一號に孤篷さんが「三十石そのほか」の一文を、直に發表されたのは、學徒たる面目だと敬服にたへぬ。然し尙ほ調査は要すると思ふ。某氏から左記の如き報告もあつたから、其儘に載す。

增補登り船獨案內 一冊 天保八 三ッ切本 淀川兩岸一覽 曉晴翁著・松川半山畫 四冊 文久元 美濃半截本（大阪府立圖書館藏）

【片町京街道川崎渡口】

船客の中にはそれ〳〵の勝手に從ひ三島江あがりには枚方前島あるは橋本淀あがりなど中途より上陸する事多し是に八軒屋にて乘船の砌船頭に告て誂へ置べししかせざれば其期にのぞみ此事を告るといへども船頭承引ずして難儀に及ぶあり必ず乘場にて忘れなば此邊にても約すべき事にこそ（一覽上り船之部上）

南岸

枚方 大阪より五里兩本願寺掛所ありはたごや茶や町あり下りのり合船毎夜出る（獨案內）

橋本 下り乘合船毎夜有之（獨案內）

金橋の上にあり大阪街道の驛にして人家の地十一ケあり茶店旅舍多くいたつて繁花なり八幡へ參詣の人この所より上りてよろし（一覽上り船之部上）

淀城 旅舍は小橋兩岸に多くありて上り下り船自由なり所謂街道第一の繁花なり（一覽上り船之部上）

北岸

三島江 此所川べりに茶や有中途よりのる人中食出きる也（獨案內）

唐さき村の下にあり番田村より此所まで水上凡二十丁といふ川邊に茶屋ありて酒飯を商ふ又船客の勝手によりて此所より上るなり或は乘るありて多く此岸に舟をつく上下ともに同じ此所より大阪まで陸路行程四里（一覽下り船の部下）

前島 此所川べりに茶やありて中食等できる也毎夜下船有之（獨案內）

道西濱の下にあり此所川邊に茶店ありて酒飯とも自由なり勝手につき此ところより上る客あり又乘客あり上下りともに同じ上枚より此所の乘場まで水上凡三十六丁半餘といふ此所より大阪まで陸行程六里なり（一覽下り船之部上）

これは一資料であつて、途中船着場は、まだ〳〵多かつたと察して居る。在阪川柳家に徹底的鄕土研究を希ふ次第である（十月八日記）

(321)

成人をすれハ女て藏か立

東魚＝揚家の女と流ではないか、美少女が年頃になつたお蔭で玉の輿、軈て親元も藏が立つ。

壓山＝藏も建ち、扶持にも有りつき、一家一族が浮び上る。

省二＝諺に、「女の子は飯櫃。」

(322) **建立佛に付る鶉**

省二＝淺草寺内などに、鷄が飼はれて居るが如く、建立佛の願主が、鶉を奉納するのではなからうかと、解したのであつたが、一説に唐丸籠の見立で、佛像を納める際、損ぜぬように金網籠をかけるのではないかといふ。面白い見方であつて、そこに特に建立佛と限つた意味に添ふものなしとしない。然し「武玉川」にある「鶉」の句は、動物を詠むだものが多い。「鶉」とせず「鷄」とあつたなら、最早說の別れるところはないのであるのだが。

東魚＝矢張り、鶉を奉納する方らしく、考へ直させられた。

壓山＝鶉を奉納すると云ふ事を聞かぬが、鷄の誤記ではない歟。

(323) **藪入過の廣い臺所**

東魚＝藪入りに歸つてきてゐた吾が子が、再び主家へ立戻つたので、昨日迄久し振りの馳走に、何やかや立働き、取散らした台所も今日はもの淋しく片付いて、廣く感ぜられる

壓山＝櫻の散つた後の、花の山の感がある。

省二＝ガランとして、物足りない感じを、「廣い」で現し得て得る。後出する(330)『藪入を送た跡の鏡立』と列べて味ひたい。

(324) **しのふ艸夜着の上からうなされる**

省二＝人目を忍むでのことなので、眠れば直にうなされる。

東魚＝「上から」とあるのは、かつぐ夜着も何かなし重たい心持ちが、現はされてゐるやうに思ふ。

壓山＝何とも正解を下し難い。

(325) **紫の天窓を廻る十八寺**

東魚＝これも亦難句。紫とは紫衣の僧であらうか。十八寺とはその末寺十八といふのであらうか。

壓山＝淨土宗の寺院の住職が、隱居して紫衣（所謂引込紫衣）を着て、挨拶の爲に十八檀林を巡廻すると云ふ句で、關東十八檀林は「言泉」に據ると、光明寺、傳通院、壽經寺、增上寺、幡隨院、靈巖寺、靈山寺、淨國寺、大善寺、勝願寺、運馨寺、常福寺、大念寺、弘經寺（飯沼）、弘經寺（結城）、東漸寺、大巖寺、大光院、善導寺の十九寺が擧げてあり、「讀史備考」には、前の中の壽經寺がなく、此方が正しいのであらう。

省二＝「佛教大辭典」の一節。德川家康彌陀の十八願に擬し、松平十八公の盛運を祈らしむる意によりて、建立せられたりと云へども天和以後に至りて、初めて確立せるものの如し、中に就き光明、傳通、常福、大光、弘經の五寺を、紫衣檀林といひ、幡隨以下の十二寺を香衣檀林と稱するは、其の寺格衣體による名にして、特に光明、傳通の二寺は知增兩上の候補地なるを以て、二枚紫衣と稱す。

(326) **時鳥積るうらミを飲て見せ**

省二＝血を吐く程の思ひなのであらう。積る恨みを語るべく酒の力を借りる。

東魚＝「見せ」と措いた心持ちが、はつきり分らないが、前說の如くであらうかと思はれる。

壓山＝此の句の表を見ると、時鳥が怨を抱いてゐるやうである。

(327) **聟に來て思ひの外の鳥甲**

東魚＝思ひの外、どうだといふのか不明である。こんな馬鹿げたやうな、鳥甲などを被らせられるのか、おや〳〵と云つたやうな事であらうか。

壓山＝樂人の聟かも知れないが、句意が全く判明しない。

省二＝鳥甲などかぶるとは、思ひもよらぬ事であつたと、入聟丈けに、今更致し方のない場面。（初篇の『鳥甲見て歸る弟子入』など、少し參考になると思ふ。）

(328) **峰でうつ火ハ紅の蹴廻し**

省二＝峰でうつ火なのだから、蹴廻しといふ形容は、應はしくない氣がする。

東魚＝分らない。「峰でうつ火」とは、どういふ事であらう。火打石で火をうつと云ふのか。

壓山＝蹴廻しは「言泉」に、袴の裾の足にかゝる分部とある故、武人の山狩かとも思はれる。

省二＝蹴廻しは私もその樣に解した。「紅」は「火」にかゝるとして、『絹紅の裾はづかしき秋の山』（武・一四）で、紅の裾は形容である如くに、紅の蹴廻しも形容かと思ふ。さすれば麓で火を打つと云ひたい。

(329) **艸の戸やしらへハ帶に成にけり**

東魚＝草庵にわび住む人が、皷の緒を帶として纏ふてゐる。昔床しく思はれる。

壓山＝調の緒と云はねば、語を成さない。

省二＝調緒を、「しらべ」と略し得る。

(330) **藪入を送た跡に鏡立**

省二＝藪入りが歸つた跡に鏡立が殘る。一時に淋しくなつた思ひ。

東魚＝華かに賑かであつたあとの、一抹の哀愁が思はれる。藪入つたのは屋敷勤めなどする娘であらう。

壓山＝昔の婦女等は、鏡臺を使用し了ると直に取片附けたもので、何時までも部屋の隅などに据ゑ置くと、切見世長屋の女郎のやうだと、他人に嘲笑されたのである。

武玉川四編研究正誤表（二〇二號）

(頁)	(段)	(行)	(誤)	(正)
八	一	四	句訥	調
八	四	二十一	へふれて	つ
九	二	八	卿	聊
九	四	十二	年功	切
九	四	十三	同	切
九	四	十四	同	切

あらゆる趣味のお稽古場
手はぢきから奥義まで氣輕く、樂しく、御上達
松坂倶樂部
會員募集
お稽古目
長常磐
清元津唄
小唄物
尺八曲
舞踊曲
箏能樂
ピアノ
聲樂道
書道
日本畫
華道
洋料理
俳句
氣棋
學道
松坂レコード込所
川柳講座
川柳雜誌主幹
麻生路郎先生
擔當
はみ込申御
七階松坂倶樂部へ
電話(代表)戎三〇〇三番
松坂屋
大阪日本橋

狸

前田五健

大人のお伽話「狸」も愈よ讃岐から伊豫地へ移つて來たが、此處で一つ傳說でない實際の即ち現在の養狸の事を述べて見よう。

元來四國地方は山野に狸の好物が澤山あつて、高知營林局經濟更生課の話によると、四國は狸の棲息に尤も適當して居る。從つて農山村の副業として女子供にでも樂に飼へる。伊豫の新居郡加茂村（伊豫線西條驛より加茂川に沿つて源へ十數キロの地點）などは四國の狸村と云はれる程で當局も大いに力瘤を入れて應援をして居るさうである。

御承知の通り狸は寒いところで飼ふ程毛皮が良質で加茂村の如き四國アルプス連峰石鎚山に近い所などは飼育に尤も適して居る所で、例の松山八百八狸の王將刑部狸が本陣とした上浮穴郡久万山鄕も同じく此の高地だから實際と傳說と一脈通ずるものがあつて面白い。

話は現代に戻つて石鎚山麓加茂村の養狸王高橋氏は六十幾匹も飼つて成績を擧げて居る。昭和八年に四匹の狸が九年に十と成り、十年十六、十一年二十六十四年に四十九、本年は六十一頭と云ふ樣に增殖して費用は種狸が九十圓から二百圓位、一戸二十頭を飼育單位として飼育舍が二百五十圓、一ケ年の飼料が二百圓、毛皮一枚約十五圓と見て六百圓差引四百圓と成る、毛皮として賣るより種狸として賣る方が目下としては利益が多いと語つて居る。

納屋、物置、土藏、庇等の一部を利用して小屋を造り、食物は何んでも食ふ雜食家故餘り物で澤山、成狸一頭一日分一錢位出產數は年一回普通三頭乃至五頭の子狸を生じ、八、九ヶ月で親に成る。

此の地方は人間樣も主食とする玉蜀黍が澤山出來るから、これをあてゝ置けば至極輕費で狸が增殖される譯だ。毛皮は一枚十五圓から二十圓內外、少し辛抱强くやれば八百八狸は樂々と云ふお伽話の樣な本當の話である。以上は高知營林局梅木さんの話であるが、四國殊に伊豫に狸の傳說が多いのも故なしと云つてもよい。それにお向ひの廣島にも狸傳說が相當ある樣であり、山口にも有名な狸島がある程で、これが相關聯しお伽話や傳說が面白く綴り合はされて出來たものと想像させられる。さて豫讃線の住友銅山で名高い新居濱驛へ降りると、此所の驛で賣つて居る名物「小女郎飴」を御覽になるであらう。五分位の大きさの飴で、五色の筋が入り女性的な飴である。由來書には製造元の祖先が靈夢に因つて製造したとあり、勿論靈夢の主人公は「狸」である。德川末期此の銅山の麓に貧乏なお百姓さんがあり、その娘が高利貸に苦るしめられて大阪へ身賣りする。それを聞いた狸が、その娘に成つて大阪へ賣られて行く。二、三日する內に現はれて問題になり代官が詐僞行爲として動き出すそれを又狸があれこれと惱やまして、殊に事件の本源高利貸の手先となつて弛然非通な岡ッ引が特に飜弄され、結局惡が滅んで善が榮える結末の傳說であるが、女性の狸だけに、傳說中色々のお色氣があつて興を引いて居る。此の傳說を纏めて傳說から產れた飴が小女郎飴である。

傳說はこゝから產れたもので貞享年間に壬生川町に悟達の禪僧南明和尙が住んで居た。

大德と狸と語る夜長哉

南明和尙と「喜左衞門狸」とは至つて心安く、圍碁の對手もすれば小僧の代理もやり、又寺男とも成つて至つて便利な狸であつた。町家の佛事法要の時はよく選ばれてお伴する。それは御馳走が喜左に非常の樂しみでこの食ふ爲めにお經も習ひ、重い荷も擔つぎ、奉公する譯で支那の魚藍觀音の傳說にも一寸似通つた點がある。

「ウーイ」

よい加減に醉つた喜左衞門は四角に座つて居れぬ。形が崩れかけると、ギロリと南明和尙の眼が光つて叱る。ハット驚いて座り直す然し醉つた心は、どうにも成らぬ。大きな尻尾が出る。

「喜左ッ尻尾が出とるッ」

何度も叱られるのが村人や町家の人に、いつと無く知られて初めは怖はがつた人々も段々馴く一團に交つて踊る。月も更けて誰れかゞ、「モウ歸らう」と云ふと喜左の機嫌は惡るい。云ひ出した者に惡戲をする。だから大氣味神社の盆踊では「歸らう」と云ふ事を口に出さず、手で合圖して歸る事に成つて居る。

○○家の船（現在もある家の事なれば○○として置く）が壬生川港を出る時、船上に竹の皮笠が在ると、それは喜左が便を借つて上船したもので、船頭は「喜左さんだ」「喜左が乘つて居る」と以心傳心、赤飯を供へる船が目的地へ着くと何時の間にやら笠は見えない。此の船主はキット儲かつて歸る。喜左衞門樣樣」であつたが代が替り、事に馴れると粗末に成り易い。間もなく喜代の氣分に觸れて元の下り坂に成つた。

これ程神通自在、鄕黨の人々に崇め親まれた喜左も南明和尙逝き、寺も住職が變り、時代も變つて寺も昔の如くでない財政困難に成つた。此の時喜左は報恩の心から本堂修理に瓦を寄進すべく註文したが、これをお寺へ通して無かつた手落ちから寺では刎ねつけ、瓦屋の立腹から二度目に喜左が農家の老爺に化けて催促に行つた時、計略を用ひて「此の不都合狸奴」と瓦竈に閉ぢ込めて燒いて終つた。喜左の末路としては悲慘の極である意志の疎通は怖ろしい結果を呼ぶ。今も昔も人も狸も變りは無い。

か……然し此の事が後日判明して喜左は祀られ、瓦屋は沒落する。此の寄進問題で船主の出し澁りから船主も沒落する。喜左は「大氣味神社」として祀られる。饅頭として賣り出され、傳說と共に今に云ひ聞かされて居る次第である。

總て傳說は耳に入り易い講話の目標は「低き所に目標をつけて話す、これが秘訣である」と、四國遍路と弘法大師に關聯する話にも、其他勸善懲惡を巧みに傳說は裏面に隱して說く所は處世上見逃せない點であり川柳人として作句上にも考へなければいけない所であらうと思ふ。

狸はユーモリストであると共に其中に一つの味を持つて居る「さもあるべし」の覘ひ所を人智に依つて說かれるには、狸はイ、存在であるかも知れない。それは狸の持つ「飄逸」「感謝皷腹」「雜氣感」から來る根ざしと芽生えであらう。（つゞく）

路の生先郎

色紙・短冊頒布

色紙　A五圓　B七圓　C十圓
短冊　A三圓　B五圓　C七圓

★新年掛の申込（前金）は**十二月十五日**迄御希望の句あれば明記されたし。

川柳雜誌社營業部

次は新居濱市から西へ壬生川驛で下車すると驛前に堂々たる「たぬき饅頭」の看板を見るであらう。驛から數町離れた所に大氣味神社があり「喜左衞門狸」の

扁桃腺炎 12
効奏・期短・服內
ルジパルア錠

愚談

小畑自由朗

隣保精神

わたエがなあ奥さん、市場から鰯、いゝえ、鰯位ひの小さい鯛だんねやけど、五六匹買うて來てちよつと棚元に置いとりましたら、お宅の三毛ちやんが來やはつて、ほゝゝゝ、でもわたエが仕舞うとくのを忘れとりましたのが悪うおまんねやさかいに、戻つて來やはつても決して叱りなはらん樣に、わてエからお願ひしときまつさ。

絶叫

町一番と自負して居た老先生が、突如！腦溢血で引つ繰り返つて曰く「横町の小僧でも良い早く呼んでくれッ！」と、即ち其の小僧とは、近頃賣出しのにくさもにくい新進の醫學博士であつた。

夫の場合

一杯氣嫌で、河豚を提げて歸つて來た亭主へ「わたエ等はまだ命がおしいおまんねやさかいに」と、女房は子供をおんぶすると「あんた一人でみんなおたべやす」と、活動へ出かけて行つた。

妻の場合

子供「ちやんよ、何故に莨を喫はるゝにや」

子の父「習慣なり、怖る可き悪癖なり、さればにや、ちやんの陸軍大將に成り損ねたるは、このニコチンと云へる毒素の爲に頭をしてやられたるが故なり、されば汝長ずるとも、かゝる悪癖に染むることなく、大將に成ることにいそしむべし」

子の母「さればちやんよ、酒は何故にあふらるゝにや」

子の父「何ッ！うざ〳〵ぬかしやあがるとはり倒ほすぞ」

程度

考えて見ると、此の非常時局に、頭髪をのばして、蜻蛉の樣に光らして居ることの如何に無意味であるかに思ひ及ぼした彼は、早速丸刈りにしてしまつた感激性の強い禿頭の社長はこれを大いに賞揚して、社全體に斷髪令を下した。彼は又鬚の如何に無意味なるかに思ひ及ぼすと鼻下に早速剃刀を當てゝしまつた鬚が御自慢の社長は、敢えてこれを社全般に強要仕樣とはしなかつた。

彼は尚、目の上に横はる眉毛が、吾々實生活に何等の必要も無きことに思ひ及ぼすと、おかしくなつて、遂にこれも剃り落してしまつた、ブルべらぼうに成つた彼の顔を社長がつら〳〵と打ちながめ乍らとう〳〵怒り出した、「一體眉毛を剃ると吾々國民にどれだけの利益があると云ふのかッ！」

破談

バナゝの皮にすべりはつて、轉びはつて、ハイヒールの踵をとばしはつた有樣を、間の悪いことには、其の話の定つて居た先樣のお聟さんにならはる人の姉さんと妹はんが見てはつたもんだすさかいに。

黄金狂時代

彼の山にも此の山にも、金が出る金が出る、と、山の鳶が舞ひ歩いて、百姓さんのふところからざく〳〵〳〵と金が出た。

體驗？

獨身のおばはんの家を訪問する場合には努めて其の隣近所と挨拶を取り交してから這入つて行く方がよろしいさうである。

豫言

男も女も丸坊主に成つて、黒一色の着物に統一したら、吾々人類の煩悶は約半分程消滅するであらう。

共存共榮

村の人達が片ッ端から死んでおくれて、目が廻る程いそがしかつた。おかげ樣で庫裡の修復も充貳分に出來て、阿彌陀樣の金泊も張り更え、村長さんの家にも負けない樣な藏も建てた。さうして毎日を張り切つて働いて居る内に、とう〳〵村中の人達が皆んなきれいさつぱり死に絶えて、自分獨りだけが取り殘されて、それでは何んの必要もない自分の生命に、今更乍ら吃驚した、とたんに山寺の和尚さんは晝寢の夢から覺めて、「あゝよかつた」と、阿彌陀樣に兩手を合して、其の禿げ切り給へるお姿の痛々しさに、「さうぢや」と叫ぶが如く立上つて寺總代の家へと急いだ。

一路集

募集句

襷

大研子選

赤襷決意の程を眉に見る　みづほ
添乳して襷のまゝで寢てしまい　光路
赤襷しつかりやれとたゝかれる　抱逸
姉ちやんの襷に猫がジヤレて居る　翠芳
襷がけ働けさうな女なり　灯竿
若旦那何をするのか襷がけ　蘇州
非常時を我が事にして襷かけ　角堂
すや〳〵と寢かせて襷かけなほし　賢次
白襷故郷の方を向いてゐる　寄與史
白襷眞赤に染めて殊勲甲　照波
襷がけちよい〳〵のぞく子の寢息　綠翠
赤襷最後に母の手を握り　小雅子
紅襷かけて奉仕の鍬をとり　靜子
日本の女性襷といふ武裝　九坡
間の悪い話へ襷持つてゐる　香林坊
襷がけ女働く顔になり　同
應接間うかと忘れてゐた襷　川久
襷がけとん〳〵とんからりと唄ひ　同
親しさに襷を借りて台所　葉光
生甲斐を知つて樂しい紅襷　同
菊の香と噂の中へ赤襷　市多樓
赤襷今晴々と出るところ　同
(佳)襷きりゝと姑のお氣にいり　美奈子
(同)襷まだ純綿のまゝ使はれる　琴聲
(同)赤襷掛けて昨日の醜でなし　九坡

咳

紫香選

講堂の咳滿場の視線が來　洋子
吸入だ濕布だ獨り兒咳をする　失名
默禱の一瞬咳もなく靜か　青笠
虚弱體母の氣になる咳をする　神樂
母親が共に泣いてる百日咳　對州坊
感激で寢つけぬと云ふ父の咳　葉光
咳止めの頓服咳でふいになり　千斗
母親の咳へ藥草煮つめられ　已之介
金持ちの子も百日咳を病み　市多樓
咄辯は草稿にない咳となり　蘇州
御訓旨に所長きまつて咳をする　抱逸
電話口氣乘りのしない咳を聞き　九坡
全身を搖すつて老人咳をする　翠芳
咳をする間剃刀上へ向け　琴聲
賣藥の屆いた時に咳は休み　灯竿
吊皮で咳こんで來るつらさなり　小城子
咳をする兒に今夜も寢かされず　龜水
咳こんで絲瓜の水をこぼして來　角堂
咳すれば雞くゝと鳴いてくる　香林坊
空つ風隣も咳をしてるなり　みづほ
病院のもみぢへ淋しく咳をする　小雅子
老父何か言ふ氣の咳を一つする　彌生
聞きなれた咳へ安堵の旅返り　白鷗
咳ばかりしてる娘の美しさ　綠翠
喘息の咳へ苦しく咽喉が鳴り　照波
咳一つ二つ事務所へ秋が來る　久
咳輕く母の夜業はまだつゞき　靜子
咳一つ二つ見合の席靜か　風來子
停年の咳も淋しきものゝうち　春巢
(佳)存在を認めて欲しい咳一つ　指洋
(同)後月を拂ふと家主咳もせず　賢次
(同)生姜湯でなほつてしまふ父の咳　寄與史
(同)打診する醫師にもあつた輕い咳　灯竿
(同)咳の子に粉藥が散る枕元　一龜
(同)先生の咳黑板の方へむき　美奈子
(軸)重態の耳打ちへ小さな咳を聞く　紫香

濕布にエキホス

感冒、肺炎、肋膜炎、扁桃腺炎、齒痛、乳房炎、月經痛、腰痛、火傷等……は

エキホスの好適症にして迅速—確實—安全に奏効し使用法も至極簡便なり

包裝
一〇〇瓦
二五〇瓦
五〇〇瓦
二瓩

EXIHOS

C—27

近作柳樽

麻生路郎選

どこからが脚かわからぬモンペなり　海拉爾　小川靜觀堂
いまにして八紘一宇の菊花節　同
仕替の妓椰子の樹蔭で足袋をぬぎ　同

北滿風景

賣店の繪ハガキとうから切れてます　同
守備隊の樹々のあはひが夕燒けて　同
白樺のかなた大きな街らしい　同
常會が濟むでモンペの作り方　同
廢物利用たいして要らぬものが出來　同
空腹へしみ〴〵貨車の長さ知る　伊丹　酒井美知夫
新墓の好物雨に濡れて居る　同
買ふ金がある譯でなしピアノ見る　同
ラヂオ屋に賴めばあつけない故障　同
誰が賣るのか古着屋に袈裟　同
拾ひ屋の帽子季節が違つて居　同
手をたゝく二階巡査に見上げられ　同
家柄が風邪引きやすい子に育て　同

蟹取舟遭難

わが腕で救へず沖の灯を見つめ　大阪　加藤ライト
生めよ殖やせよ世活費に追はれ　同
ハンカチの猫へ車掌は瞳をそらし　同
節米へ犬捨てられることになり　同
名譽職捨ててかかつた主張なり　同
演習の合間モンペイ飯を煮き　同
愛嬌を見せてモンペイ注意され　同
新婚の旅指さされ指さされ　同
結婚難そやかてロボットになられず　大阪　橋本美奈子
お嫁さんになつたのか知ら片便り　同
又一人殖やしたと友の文がくる　同
アルバムへモンペ姿がふえてくる　同
ピンポンへ一寸はにかむ好きな人　同
紙芝居買はない子へは笑はない　同
動物園虎をよろこぶ子が欲しい　同
野外教授先へ走つて鼻緒すげ　松江　寵光寺　豹
婦人會でならつた通り毛糸蒸し　同
陽が當るからなほうまし握り飯　同
病人に柿の熟れたを教へられ　同
萬葉集毎夜寢床の一頁　同
御免ネと授乳の時間ゆりおこし　同
雨よ降れ〴〵電氣時計が遲れるよ　大阪　富岡亘人
ヒコーキ・ヒコーキ一番小さい子が轉び　同
思惑の外れた父の獨り言　同
敷島の大和心は自爆なり　同
くよ〳〵とせずに空見よ海を見よ　同
からかつて阿呆に馬鹿と怒鳴られた　同

大陸堅氣

大陸の先驅者と只さけぶだけ　蒙疆　宇敷桃水

十一月七日阿部中將戰死一周年忌

陰山の雪將軍の目を思ひ　同

北支鐵道生活斷片

地下足袋の構内主任あなどれず　同
下ッ葉の噂は知らず副參事　同
黄塵のプラットホーム月赤く　同
水兵ッツと笑つてウオーター五人前　大阪　遠見路
財布のしづくかアルミの二三枚　同
佛壇に一人揃うて子を拜み　同
本床に生花も無く天照大神宮　同
バスガール男の尻を押し込んだ　同

平穩村雜記（三）

蛭子省二

◈八月廿三日東京の阿部佐保蘭さんが御令妹の養生に湯ヶ原へ行かれた足を湯田中に廻はし我忘園の離れ間で枕を列べて眠つたのは有難い川柳緣であつた。一ト足先きに入湯した私が、安代、澁、上林溫泉を案内し、萬人風呂に赤裸々となつて詩談を交換し、途に手打そばを味賞した。君も亦活動家である。對談の一節が記錄されてあるから報告致したい。

蛭子＝英譯川柳（SHK）へのお骨折りは常に心から感謝致してゐます。總て仕事は順逆二方面から研究を進めて完成するかに思ふ。貴台は順に棹さしての御工夫々私は逆に遡つて拜見して居るわけです。だからお氣に召さぬ事も申上げねばならぬ立場にあります。

阿部＝私の本職が多忙な爲に思ふやうに進捗しないのでお恥しい次第です。やりたい事は多々あるんですが。

蛭子＝讀者の興味をそゝる上に於て原稿にはまゝ毒言をもる必要がある。（毒藥變じて藥となるで。）故に聊か大膽に申上げる卑見は英語の教授方には一顧の値もありませんかハァ〳〵〳〵あの「英譯川柳名句選」は一應眼を通しましたが譯し方に顯著な一ト癖があります。取材はかなり失敗。くだらぬ後家さんの句などが多い。然し私共の內輪での研究には參考本であります。

阿部＝どう致しまして。お蔭でSHK一號並に二號の宮森教授の英譯が川柳的觀點からも完全なものになりましたし、堀教授の分にしましても一寸氣付かぬにゐる點を指摘される事により、研究の據り處に力を得て私自身もどんなに啓蒙されたかわかりません。從來の御高評は蛭子大人一人舞台の觀があり聊か當てはずれ、他の方も御感想をお洩し願ひたいのです。「英譯川柳名句選」は同志で輪講をと考へてゐます。準備が出來た節はよろしく。

蛭子＝イヤ私は英語は判らないんです。洋行もせず、ヤット信州へ來た始末ですからネ。英譯川柳レコードは期待致します時局柄急ぐ要はありませんから十分御準備になつて眞價を示して下さい。

阿部＝レコードは歌壇俳壇で

神の國神の子日本强い筈　廣島縣竹原町　西野みづほ
片腕は興亞に捧げ菊作る　同
綱引の負けてる方に居る吾が子　同
一旗を夢に北支の切符購ふ　同
親の無い子供で山羊と仲がよし　同
夕刊に言ひたいことが載つている　大阪　吉川琴聲
ほんとうは杏下の穴氣にかゝり　同
郊外に住んでミシンを買ふつもり　同
横濱の雨日本を去る日なり　同
金のあることが不幸な未亡人　同
青空が秋の美術と云ひたいね　大阪　夷一笑
かづら髷エキゾチズムに屬する美　同
針醫者のかへりにまわる天王寺　同
キユーピスト僕のハートは右にあり　同
人間がいやだとは君ぜいたくな　同
祭の夜子と行く父の妻楊子　岡山　生子洋子
我儘を電話で言うは派手な聲　同
反省も理性も虫の聲に消え　同
夜遊びの子へ母親の敷いた寢間　同
軍需工今日は家族と別府行き　同
バット一二分の一用件終りぬ　松山　芝田靈子
遠足の子をよろこばす橋があり　同
乳房ふくらむ毛糸のあかき服　同
お燈明さらりと心洗いたる　同
大根を貰つて妻への土産とす　同
赤ちやんの癇癪セルロイドをつぶし　松江　田中都之介
明治節うちの行事は子を撮し　同
何よりの土産おむつの布を呉れ　同
子が丁度勸誘員へ泣いてくれ　同
子を抱いて出て飛行機が間に合はず　同
子澤山年の順から寢てしまい　大阪　山川富士
急援車人夫は乘れるだけ乘つて　同
申譯ほど置いてある防火砂　同
借り貸しは安い事なり隣組　同
散髪屋野球の方へ氣を取られ　同
國勢調査妻のみが知る子等の年　布哇　長谷川猿吉
盜まれた大根の穴が太く見え　同
指紋法憚りのなき此の兩手　同
貰ふ身になれば粗末にならぬ水　同
我が仕事濡れてでお米拾ふやう　同
日本の何處まで伸びる地圖を買ひ　岡山　鈴木九坡
轉業の活字へ夫婦默り込み　同
轉業へちとこの腕が細過ぎる　同
餘りにも小さき慾を笑はれる　同

備中神ノ島にて(二句)

島の秋宿の看板ちと汚れ　同
賣つてゐるものは柿だけ島の秋　同
下宿屋へ幅をきかして軍需工　朝鮮　廣津柳蹊
天と地と人間小さく見ゆる日よ　同
兄が二人もあるに藝者へ賣られ行く　同
啄木の一生金には勝てなんだ　同
理窟などあるか電髪禁止令　同

病床より

飛行機も月も寢ながら拜む身だ　布哇　三輪晩翠
看護婦を天職と云ふ若い聲　同

隣室も同宗の病人

隣室の病人矢張り飲けるロ　同
活潑な病人醫者の氣に入らず　同
癈人になるには婆婆氣ありあまる　同
ささやきそうに張り板と石鹼皿　東京　田中青風
電話帳產婆を探すもどかしさ　同
絶體安靜ですとお醫者はみじろがず　同
刀鋸冶雜念なんか持たぬ顏　同
馬よけて大根一本むこう踏み　松山　友田白梅女
彈丸運ぶだけで春秋幾山河　同
病む人に「小島の春」を敎へんか　同
純毛で幼年校が歸省する　同
交番のきつねと飯に走らされ　大阪　横井太呂
約束ははたすつもりが養子の身　同
風車一つ一つへ吹いて見せ　同
鉛筆を削りなをして子に泣かれ　同
お見舞に來て退院に歸られず　同
インテリーにあらず極度の近視眼　山口縣　三原狂路
物價高其の上に子の咳をする　同
院長が見ても今更おそすぎる　同
眞白いものへ神經とがりすぎ　同
白々とピアノへ薔薇の冷淡さ　岡山　逸見灯竿
サボテンは鬼が島から掘つて來た　同

も未踏の地なので、私としましては愼重を期し、堀教授の最もよいコンヂションのおりに精選して吹込んで戴くつもり。ポリドールから二十餘枚續きの敎育レコードを依囑され、この方はうんと吹込料が入るんださうですが、どうも氣分が進まんからと、もう三年になるといふ有樣なのに、SHKには大變理解され即座に快諾を得ましたのは川柳のもつ大きな力の一つだと感じました。

蛭子＝敎會では禮拜の始に讃美歌により神の榮光をたゝへ嚴肅な氣分聖化をする。句會には勿論統制が要る。それは雰圍氣を作るにある。開會に當つて川柳レコードを掛けるなども一策。從つて句內容、音樂價値が大切です。所謂名調子も結構ですが卒直に云ふと川柳家の音聲は練習が積まれてゐない。寒聲の稽古位はやらねばなりませんね。放送の川柳寸劇などで、落ちに川柳家が句をよむと、比較して實に貧弱さがあり〳〵と判ります。

阿部＝私共の句會では試みました。途端に靜肅になつて一種の雰圍氣を醸した事を覺えてゐます。先日故吉本武郎の追悼句會にも當事者が掛けられ、幽明境を異にする人の聲が聽かれ一層効果的でした。「湯の村」や「川柳雜誌」あたりでも此機會にお殘しになつてはいかゞです。大體名句は名リズムのもの例へば『こんな川の水でも海へ行くのだぜ』(紫痴郎)これは「世記の川柳展」の爲に今書いて頂いたのですが、これが作者の脫俗的な姿の中から音聲となつて響いて來たら、色紙で見るより一層立體的なものとなり感銘を與へるんぢやないでせうか。練習を積めば結構ですが、それは若い人に於て効果的で先輩の場合は寧ろ有りの儘で色々面白味があるんぢやないでせうか。

蛭子＝その有りの儘とは修業の積んだ有りの儘でなくてはならんでせう。名句は名リズムのもの、それを發聲で破壞したくない。換言すれば概して平素の披講がやりッぱなしの氣味はありませんか。群衆心理に捕はれて上ワ辷りにネ。初對面から理窟ぽくなりました。園主とは三十餘年振りの再會なのです。此

株式會社
田中源太郎商店
大阪市北區樋上町
電話北(36)二五六六
營業所 大阪・東京・札幌・小倉・神戸・天津・北京・上海・奉天

品目
純國產GTC潤滑油及グリース
國產GTCオイルダツグ・グレダツグ
GTC遠心式油淸淨機
GTCピストンリング

陽の惠こゝも乞食の秋にして　同

九坡君の父君の死を悼む

秋の陽は落ちたり草に露おきて　同

木犀の香は御不淨の屋根を越え　愛媛縣大洲町　上甲可洲

水撒けばよちよち死んだ子が走り　同

あやまりの一手で媒姆は泣き止ませ　同

蟷螂の姙婦のやうな顔でゐる　同

金剛山探勝毘盧峯にて

峯高しここより霧を降らしめる　朝鮮　松田幸士

九龍淵にて

撮影す隣は女と手を組めり　同

四仙橋旅館にて

雨細し朴さん金さん疲れ寢る　同

海金剛にて

魚跳べり今東海の旭が昇る　同

明治節軍服の老一等卒　新義州　高木滿山

菊人形出口に近い風を知り　同

奉祝二千六百年

萬歳を首相に從ひて云つた幸　同

隣組譽れの家の稻を刈り　同

保險報國などと保險屋辯じたて　長野縣須坂町　高峰柳兒

釣堀りへ丹前退屈すてに來る　同

薄給へ湧く緣談を淋しがり　同

子寶部隊はなをすゝつて寫される　同

寢て見ればも一人寢れる四疊半　大阪　星伽龍路

笑はぬでもなしとかがもひとり立ち　同

美なるもの求めて獲たり無賴の名　同

否定した人と同棲して女工　島根縣江津町　矢田壽澄

先生は握り拳へ咳をする　同

赤襷二晝夜乘つて故郷へ寄り　同

笑つてる夢を戰友起すまい　丸亀　馬場浪二

歸還兵父の無口を淋しがり　同

明日知れぬ生命の中に兵笑ふ　同

喫茶店メニューに漫畫などを畫き　大阪　津路江多呂

假事務所藥罐のこげたのが一ツ　同

模範工嵐の夜が氣付かはれ　同

隣組もらひ風呂やらもらひ乳　奈良縣櫻田町　嶋田翠峯

母の手のいとしい程にしなびて來　同

出た時に肩をぬげとは女連　同

末稍神經ピクリと冬を知る　岡山　本田ユリ子

こと勿れ主義がポカンと天井を見　同

あのねえあのねえと電話笑ひ出し　同

國策型淑髮も金がかゝる丈　岡山　岡眞理子

お上りさん無事新體制のお膝もと　同

善後策高いしきゐを跨いで來　同

拜み倒して現金で買ひ　和歌山　秋月宏方

記者團に抱負を語る身の出世　同

掏摸もスパイも來てる樣な人出なり　同

花嫁を市電に乘せて氣をつかひ　布施　原田輝親

番附にのつた長者と隣組　同

團服の中でもまれる奉公日　同

順を間違へてパン屋に叱られる　布施　小谷華素兒

人間が檻の熊から眺められ　同

托鉢の禪僧の足もスフの足袋　同

すくと花すくすくと花曼珠沙華　大阪　公木示右

曼珠沙華五官の慾の衰へて　同

曼珠沙華生死輪廻を疑はず　同

なぐられた事もあつたに未亡人　松江　勝谷山川兒

よく釣ゐた夢恩給をとつてゐる　同

壁一重隣へ來てる回覽板　同

愛犬よ新體制だ節米だ　兵庫縣　增元甲陽

劇場の長蛇の列や賴母しや　同

奉祝二千六百年式典

近衛公一億萬の聲を出し　同

雨の日に陣中日誌を讀み初む　堺　村上角堂

月高し飛込台に昇りたい　同

戰線の味話し合ふ松葉杖　同

繩飛びへ十九のすそはおさへられ　廣島　得能紫浪

鉛筆の細さも女事務のもの　同

愚妻愚妻と云へる日の幸多き　同

身を清く保たんせめて征くまでを　廣島　石原伯峯

また失戀しちやつてネエと友來る　同

若かりしいと若かりし古日記　同

山寺へまで連になる配達夫　松江　長谷川五朗

菊畑方丈さんに見て貰ひ　同

歸還兵養子の口が二つくる　同

隣組出來て言葉があらたまり　尼崎　奥田綠翠

結納がすんだと話聞かされる　同

ただ働いて月末をこすばかり　同

コンビイで來れば女は負けてゐず　大阪　今西鼓愁

庭は御主人自作、自然の儘を活かして居る處が面目躍如。高山植物は澤山採り入れてあるんです。「庭園かゞ美」に拾載されて居る。民郎さんが缺けてるのは殘念だ。松本に下車しなかつたのは私の失敗。

阿部＝今お話によりますと、此池の鯉を信子さんが連日倦かず眺め娛しんでゐられたさうですがさもありなんと思ひます。故飴ん坊がこゝの鯉からヒントを得て句帖に書き遺した事をも先刻園主から聞きましたが、想ひは同じですね。信濃の山の美しさを說明して呉れた民郎君と松本驛でわかれて來たのですが同君も本業多忙で來られないのを殘念がつてゐました。私は園主及蛭子大人の警咳に接し本當に勿體ない位です。さつきの驟雨に一際音高く流れる溪水、湯田中の地酒の味、陶然として二千六百年の佳き年の幸の中にあります。

蛭子＝我忘園は溪聲、玄々園は鷄聲。中島父子の趣味ですヨ川柳家が入り代りやつて來て御夫人のお世話になる。其中でも私が一番氣隨氣儘者でネ。——東京で再會致しませう。引張り廻して下さい。

◇川柳句碑を作れといふ叫び は昔私が揚げた。そして句碑につき調査した處を「きやり」誌に載せた。其後若干殖えたのは滿足にたへぬ。安川さんが路郎句碑を提唱して居る。私は紫痴郎句碑建立を說いたのであつた。此溫泉地には筆塚が多い。教育國信濃を思はしめ、詩の國をも想はしめる。

◇淑人さんに連れられ全能寺に參詣した。山門に寛仁年中定朝佛師の作なりといふ仁王尊が安置され、半分向き合つて居られる。戰爭が始まると自ら動きだされるので、眞正面にかへられた時は必ず講和終局だといふ夫れは日淸日露の役に於ても亦さきの世界大戰に於ても、あつた現象なりと傳へられ、夥多の應召者の寫眞が奉納され武運長久が祈願されてある。古い傳說ではないのだから善知識の住職の頭の働きに私はお賽錢を投げ寫眞に最敬禮をしたのである。境內に鐵條網で圍まれた巨杉あり、近くまで釘が打ち込まれたものといふ。丑の時參りである。途に駄菓子屋をあさり「兎の糞」を求める。捨て難い風土趣味がある。中島農園の養鯉場で餌を與へて與がる中に、淑人さんの背負ふ籠には胡瓜茄子眞桑などが充ち滿つ。(穩かな二百十日の夜記)

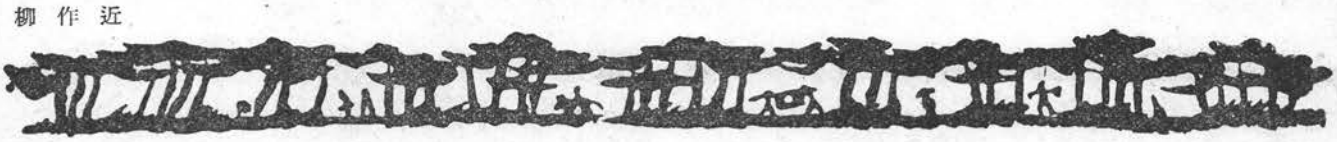
花花供生造装

環籠花花花飾

フロリスト

紅 くれない

大阪市西區京町堀通り三丁目
電話土佐堀五一三〇番



口實を聞く上役も知つてゐる　同　ア
呶鳴られるうちはまだ〳〵脈があり　石川縣小松町　勝山しとし
記念碑へ誤字は書いても閣下にて　名古屋　鈴木可香
晝休み課長に何か言はれさう　同
菊の鉢一人になると匂つてき　武部香林坊
ロマンスカーどうかと思ふ人と掛け　大阪　濱本みのる
旅すれば瑞穂の國の穂が續き　同
父親の形見も國のために出し　大阪　赤塚美竹
慰問品ビックリ箱も入れてやり　同
物價高やつぱり子供育つてる　大阪　吉田ちゑ子
忠節は菊人形の香の如く　同
叱られる覺悟少うし醉うてくる　神戸　河合明子
新體制簞笥の着物派手になり　同
懸崖の菊へ廊下の灯がはしる　兵庫縣　有馬千斗
秘密なぞ抱かず二十歳の秋を嫁く　同
名月は聞くだけ地下のサンバッ屋　大阪　高田抱逸
ブラットの柱はバットを消すところ　同
二千六百年市の合併も歴史的　大牟田　同
一錢の無駄をも締まる隣組

柿本神社祭禮

虫も唄つて神の國なること尊と　島根　田中弘樓
鉢卷を締めて奉仕の鎌を取り　同
私利私慾捨てて仲良く隣組　大阪　戸奈巳之介
常會へ意見を吐きに作業服　同
宵寢する味を覺えた四十過ぎ　岐阜　藤井紫風
勝手元此の頃値切る聲もせず　同
興亞の子將に一家に君臨し　神戸　湯淺小城子
一等で小僧時代の町を過ぎ　同
バリカンを買うて順々隣組　松江　松崎專太郎
神聖な仕事の疲れ酒が要り　同
信念もなく廻れ右廻れ右　岡山　森本素木
妻の瞳は金が世界を支配すと　同
鐵橋は昔泳ぎに行つたとこ　大阪　藤井桃園
㊙も鳥羽と山田で價が違ひ　同
永久に悔ゆる不孝を母へ詫び　堺　野島神樂

郷里

桑畑はすつくり摘んで繭のかさ　同
御主人も養子で酒はいける口　松江　伊藤廣英
友人に逢ふ校庭もなつかしく　同
國防の襷へ藝者しやんとする　岐阜　市川童顔
半額券出して小さな俺を知る　同

新體制ですと掛取拔目なし　松本　西藤義春

信州葛温泉にて

野天風呂女性交つてシャター切る　同
よりかかる氣配車内の目に困り　大阪　永井清彦
あきらめたのか秋の蚊のさしもせず　同
盃の手つきロでは羨まれ　高松　福宮白鷗
本堂は踏まぬ庭師の輕業　同
切り花のやうに女はすてられた　大阪　青野花笑
愛の巣へ戻る女給の眞面目なる　同
拾ひ屋の目と手に資源よみがへり　大阪　朝野久人
心境の變化次第に小さくなり　同
肩組んで若き生命の灯を愛でる　東京　山田宙望
失業の首途の酒といふ皮肉　同
自由結婚大阪にゐる　廣島　大山露斗
甲ばかりいただく子供弱すぎて　同
再婚がどうも氣になる藥指　山口　藤村一美
春の子が後ふりかへるチンドンや　同
戀ひ染めて若き憂ひを嘆く宵　東京　森本秋子
インキ瓶どなたへ便り書こかしら　同
撮影に二人の場所は廣くとり　尼崎　小林文月
親成に團服一人交つて居　同
ピアノ無心差押へられたとは知らず　松山　友田雨眠
敬虔な顏で叱つた女教員　同
缺點を見付けて値切る古道具　大阪　堀毛一龜
カメラマン列をはづして趣味を追ひ　同
防毒面の父の姿に子がおそれ　大阪　中西彌生
菓子箱も地味に銃後の内祝　名古屋　松井靜子
病人に建つき惡い紙障子　大阪　山本葉光
額の繪をかへてしばしは豆きせる　松江　相馬雨經
配給へいもの目方も土のまま　大阪　小泉龍三
名月を盥に入れてもてあまし　布施　上田翠峰
炭燒の講師背廣がよく似合ひ　長野縣上山田　佐二木千隈
異存ない皆んなガツチリ隣組　大阪　小野喜代志
窓の下「おい」と呼ばれて顏を出し　大分縣佐伯町　川上隆三
廢品へレターの束が見つけられ　大阪　桃木競舟
いたづらな子供に澁柿とは知らず　島根縣大田驛　石丸順子
勉强をしますと漫畫雜誌にゐ　大阪　泉雪原
初戀を初めて知つたペンの先　名古屋　八幡勿來
體操場後列のひとりテレテやり　大阪府　清水義介
抱き上げる子の重たさへ父うれし　新京　中村對州坊

高原吟

古川風竹

初秋の一日、山石と風竹とともに細君連れで車を驅つてワヒアワ高原に一浪を突訪す。彼氏が丹精の花をせしめんの下心である。一浪居は一望万頃の鳳梨畑のたゞ中、防風林の側にある。都(ホノルル)へ三十哩、ワヒアワ町に五哩、米國最大の軍營スコーフイルド師團に三哩、女婿淺倉氏の配下に數十名の比島人が働く。訪問の六日後野火が飛んで一浪の花園は全燒した。彼は平氣で、また作るよと電話した。

一浪は案山子姿でヤあハロー
五千町わしの菜園にちと廣い
何がよいのか葉の青み花の艶
高原の平和の雲へ爆擊機
十哩飛ばして生きのいい刺身
歸り路は花も鳳梨も人もゆれ

一問一答

愚問には答へず一度答へた問には答へず　——係——

問＝先日支那の子供が八九人で「子捕ろ子とろ」といふ遊びをやつてゐました。私も幼時にその遊戯をした事がありますが、永年住むでゐるのに、支那では始めてみました。支那から渡つていつたものかなど思つてゐます。古川柳に『岡場所の客は子をとろ子とろなり』(天津生)

答＝私は渡支した事がない。時局柄甚だ殘念である。「子とろ」の淵源がもろこしにあるかは疑問と思ふが、類似の遊びはあつたらしい。故に古人も『和漢あひ似たる事なり』と云つて居る。骨董集下編には、『今童遊びに、子とろ〳〵といふ事をすめり。これいと古き事なり。古へは比丘女といへり。その原は、惠心僧都經文の意をとり、地藏菩薩、罪人をうばひ取給ふを、獄卒取かへさんとする體をまなび地藏の法樂にせられしより始まれりといへり』とあつて、三國傳記を引用し詳說してある。圖も掲載され、勿論鬼はひとり丈け描かれて居るが藤原良經の作庭記には、『凡石を立る事はにぐる石一兩あれば追ふ石は七ッ八ッあるべし、たとへば童部のとてう〳〵ひるくめといふたはふれをしたるが如し』と。之れに依ると此遊戯には變遷のあつた事が判る。日支一如の現代では日本の事物風習が支那に移る事も一應は考へてみたい。(蛭子)

川協の★★ページ

★川柳忠臣藏の著者風竹氏の美擧

前號「川柳書架」欄で紹介した「川柳忠臣藏」は內地の淺野長之侯爵及日本義士會等へ寄贈、頗ぶる好評を博してゐるが著者古川風竹氏ホノルル在住（不朽洞會員）は該書を知友に頒布し、これを皇軍恤兵金として獻納の手續をとられ、既に陸軍恤兵部へ三十弗、海軍恤兵部へ三十弗日本赤十字社へ五十弗、寄附された。

因に該書は二百部限定、一部一弗（四圓强）で知友に頒布、殘本僅少で內地の需めに應じかねる由。

★文藝報國展へ川柳部の活躍

關西精動作家協會主催、大阪府市精動本部後援の「文藝報國展」が十一月十九日から廿四日まで阪急百貨店八階に於て開催され川柳部では會員の作品並びに昭和川柳社、番傘川柳社、川柳雜誌社關係の戰線勇士の作品を展覽して氣を吐いた。

關西精動作家協會の川柳部會を開く五氏
（向つて右より溪花坊・路郎・雞牛子・水府・塊人（後姿））

▼關西精動作家協會主催で大丸百貨店の國策の窓で募集した川柳「節米」の一等當選句は次の通りである。

捷つための節米なればまた愉し　（坂　澄風）

▼阪大川柳會では十一月一日夕、訪獨醫學使節布施筑川博士の歸朝歡迎並びに大阪帝國大學名譽教授拜命の長崎柳秀博士に祝意を表する會を開催、麻生路郎夫妻、川出美根子、米本貴志子女史等列席、布施博士の訪獨談があつて頗ぶる盛會であつた。

▼川雜廣島支部・福屋耕柳會・廣島川柳會合同主催藝備日日新聞社後援の奉祝二千六百年川柳大會は十一月八日、川柳雜誌社不朽洞會員濱田久米雄氏司會の下に廣島市妙頂寺に於て開催された。出席者四十八名、川柳人協會理事石崎柳石氏の「幕末勤皇運動と川柳」は時局にふさはしい講演であつた。

▼京都川柳作家聯盟會では十一月二十三日午後三時より結成祈願式を平安神宮に於て勝堂・入仙の兩氏司會の下に擧行、午後六時より記念句會を仲源寺に於て開催した。

▼松山媛柳吟社では十月廿六日第十三回而笑子翁忌を五健氏邸に於て營まれた。

▼愛媛川柳社は十一月三日川柳伊豫秋の大會を歸還された月原宵明氏の歡迎句會として開催された。

▼番傘川柳社主催の紀元二千六百年奉祝川柳會は十一月十一日午後一時より橿原神宮外苑建國會館に於て開催され、雀郎、紋太、塊人、百雷氏等出席された由。

川柳界展望

全國川柳界のこと各地川柳人の一擧手一投足を此展望欄ですぐわかる様にしたい皆様の御通信を歡迎する。（係）

▼川柳雜誌社本社句會は十一月二日午後六時御津八幡宮に於て開催▼松坂倶樂部麻生路郎川柳講座は十一月三日、十七日午後一時▼有恒倶樂部有恒川柳會は十一月十四日、廿八日午後六時▼住友親友會尼崎句會十一月十五日▼阪大川柳會十一月一日、廿五日午後四時以上何れも路郎主幹出席

▼川柳堺支部句會は十一月十三日午後七時より堺市菅原神社境內に於て開催、路郎夫妻出席

▼川雜岡山支部第一回川柳雜誌々友グループ研究會は十一月二十三日夜禁酒會館に於て開催

▼川雜今治支部は十一月二十二日に二千六百年記念句會を開催した。

▼川雜廣島支部十月例會は十月二十五日廣鐵局倶樂部に於て開催。

▼川雜下關支部句會は十一月二十日市多樓居に於て開催。

▼川雜岡山支部十一月例會は十一月十六日禁酒會館に於て開催

消息

▼阪大川柳會の長崎柳秀・布施筑川兩博士は光輝ある二千六百年の式典に參列の光榮に浴された。

▼佐々木三福氏（大連）は上海へ旅行され「惡の華金の渦大上海は暮れんとす」の一句を寄せられた。

▼麻生路郎主幹は十一月十二日午前十時から約一時間半、堺市の婦人團體に府の總動員課主催の戰時婦人生活確立講演會で熱辯を揮ひ笑ひのうちに趣旨を貫徹し、聽講者は勿論、主催者側からも好評を以て酬ひられた。

▼安井ひろし氏（大阪）は十一月五日神戶出帆のバイカル丸で靑島經由、徐州に赴任された。

▼本田溪花坊氏（大阪）は廣島へ出向かれ十一月二十三日大竹屋に於て久米雄・柳石・秋無草・俗菩薩・月喃・金十・美爾坊の諸氏と快談された。

▼川雜名古屋支部幹事、吉田水車氏は勤務先山武商會奉天支店へ榮轉され十二月早々赴任されることとなつた。滿洲各地柳友の御交誼を水車氏に代つてお願ひする。

▼姬田夕鐘氏（德島縣）は十月廿五日氏神の祭禮に御輿當屋を引當て多忙裡に消光された由。

▼橋本綠雨氏夫妻（大阪）は、十月廿六日美濃養老の瀧をとひ孝子を偲んで社へ通信があつた。

▼丸島利生氏（大阪府）は本年三月より七月まで入院療養されてゐたが幸に快癒されたとのお報せがあつた。

▼戶倉普天氏（兵庫縣）は十一月に入つてから二度目の上京、十一月三日附の繪葉書で火の海旗の波の馬場先の賑ひを報道して來られた。

慶弔

▼野本呑水氏（元不朽洞會員）は〇月〇日應召せられ勇躍征途につかれた。

▼井上吉次郎氏著隨筆集「觀るもの」の出版記念會は十一月九日午後五時半宇治電ビル九階に於て開催された。

▼大阪新美術家同盟は天王寺公園市立美術館に於て十一月十二日より十八日まで第七回美術展覽會として奉祝記念展を開催した。

▼永田里十九氏令息は十月吉日に、橋本波夢造氏令弟は十一月吉日に目出度く華燭の典を擧げられた。

▼鈴木九坡氏の嚴父は十月末逝去された。謹んで悼む。

▼大西一八步氏の祖母大西つる刀自は十月十日午前九時永眠された。行年七十四歲、冥福を祈る。

▼小森咲星氏は十月十五日午前六時逝去された。享年三十六歲、哀悼にたえない。

轉居

▼富士野鞍馬氏は京都市東山區八坂新道小松町五七二へ▼上山よしみ氏は大正區鶴町三丁目百十二番地へ▼福田山雨樓氏は濱市保土ヶ谷區岩崎町十と町名改稱

★社告

▼左記の諸氏が新たに不朽洞會へ入會された。

大阪　玉井彩泡氏（清水友帆氏紹介）
岡山　鈴木九坡氏（大森風來子氏紹介）

▼多年作句に精進されてゐた松下小柳子氏は一身上の都合により不朽洞會を退かれた。

▼支部異動　川雜堺支部幹事中原銃人氏は村上角堂氏と幹事交迭、同時に支部所在地を堺市中之町一九に移した。

アサヒビール
大日本麥酒株式會社

川柳横町

▼撫順から出てゐた「琥珀」が痛々しいほど瘦せ細つてゐたのでひそかに案じてゐたが、とうとう姿を消してしまつた。淋しいことである。▼大連の「春聯」が突如として終刊號を出した。十年の歷史を一擲して廢刊を斷行した同人諸氏の悲壯な決意は想像に難くない。▼新京の「きりん」は隔月發行となつたし多士濟々の「川柳大陸」も一寸姿を見せぬ。▼いささか氣を吐いてゐる「卷雲」は東京の出張所だし、滿洲柳壇うたた寂寥を感ぜずにはゐられぬ。靑龍刀・濤明・月南・亞三昧・正夫氏等の奮起をのぞむや切なるものがある。▼「川柳愛媛」は五健氏の牙城だけに搖ぎを見せない。高知の「帆傘」は近來、健實な所論と小數ではあるが足並みのそろつた佳吟に富む同人を持つ點に於てうれしい存在である。同人雜誌らしい同人雜誌で清澄な空氣を感ずる。水魚氏の努力に敬意を表したい。▼傳統の牙城「京」が雄々しく新體制を叫ぶ。こんなところにも昭和維新の感が深い。蘭華・二山・京二のスクラムはガッチリしてゐる。▲神戶の「視野」で鈴木小寒郎氏の「高麗雉」といふ小篇をうれしく讀んだ。小寒郎氏の生活、性質がよく出てゐて親しみを感じさせられた。▼九州では「くろがね」が廢刊されて一沫の淋しさを漂はせる。▼臺灣唯一の柳誌「國姓爺」が內地の雜誌よりも早く出るのも皮肉だ。正光氏の獨り舞臺で、氏の添削講座は全く根氣がいゝ。▼分裂作用で夏瘦せを思はされてゐた「昭和川柳」は塊人・良祐・澄風・雄午氏等の努力で漸次盛り返して來た。▼「川柳春秋」は押しも押されもせぬ研究誌となつた。▼「番傘」「ふあうすと」共に、特に申述べるほどの變化なしと云つておこう。誌面の都合で西日本の柳壇にのみ觸れた。一望すれば戰線に多少の異狀があつたやうだが質的に觀れば大した變化のあつたやうにも思へぬ。（不死鳥）

ミヅムシ
クサ
シラクモ
インキン
ハタケ
水虫　新治療劑
セイロポン

大阪市東區平野町一
發賣元　白井松新藥部
振替大阪六六八四番

各地柳壇

いのちある句を創れ

理整秋豆・郎路

投稿規清

▼用紙は原稿用紙又は投句箋の事
▼文字を正確明瞭に記載のこと
▼開催月日及場所記入のこと
▼締切は毎月廿五日とす
▼投稿先は本社宛

本社十一月例會（大阪）

十一月二日　於　御津八幡宮

出席者（順不同）

路郎・かほる・豆秋・桃園・洋・彌生・翠芳・青兒・一龜・孤篷・水客・紫香・恒喜・葭乃・晃司・鮎美・古詩郎・龍成・彩泡・水坊・リリ・花笑・鼓愁・競舟・指洋・綠雨・默平・みのる・滿潮・三巴・さと子・潮花・白峯・安靜・友帆

席題「留守番」　互選

留守番の留守と斷る役があり　彌生
仕事する氣で留守番はしたものの　桃園
留守番はただコスモスを見たまま　水坊
留守番の女中が唄ふ流行歌　紫香
留守番は新聞代を事づかり　かほる
留守番へラヂオは國債買ひましう　鮎美
留守番はとにかく炬燵あてがはれ　孤篷
留守番は只そう申します申ます　青兒
留守番は主人何もわからない　潮花
留守番へ遣ふ電話が刺戟する　晃司
書留が來て留守番はうろたへる　豆秋
留守番でわかりまへんと電話口　同
留守番は錠前かけて本をよみ　青兒
留守番に成る日の米を心配し　安靜
留守番に不幸な戀を聞かされる　同
留守番はラヂオの前に床をしき　競舟
留守番の晝寢日の丸ぬれてます　鼓愁
留守番の父は植木をいぢつてゐ　花笑
留守番に朝の牛乳飲まれたり　水客
留守番は大きな猫にのぞかれる　あきら
留守居して主人の格も一寸見せ　同

席題「モンペイ」　青兒選

モンペイをはいた時まで薄化粧　龍成
モンペいま御堂筋行く使命あり　晃司
モンペイは亡母の香りの紺絣　古詩郎
モンペイの今日は無口の母でなし　彩泡
モンペイの遺兒を希望に強く生き　一龜
モンペイの姉と妹と母とゐる　水客
市場へもモンペイで來る訓練日　默平
分會旗持つモンペイは胸を張り　豆秋
モンペイの母へ速達屆けに來　紫香
モンペイの妻のちからのあなどれず　鮎美
モンペイの柄もやつぱり十八九　彩泡
奥さんのモンペイはいてくる女中　紫香
親娘揃つてモンペ元氣なり　水坊
モンペイの逆光カメラ逃さない　水客
モンペイをはかぬ一人はみつめられ　孤篷
モンペイの素足になつて潔よし　滿潮
敢然とモンペに惜しい柄を切り　三巴
（佳）モンペイで來て國債を買うて去に　鮎美
モンペイをはいて興亞の子を育て　一龜
講評を聽くモンペイは水に濡れ　古詩郎

席題「健　康」　白峯選

健康は朝の空氣をみんな吸ひ　青兒
健康な笑ひネクタイ曲つてる　水坊
健康で暮せと云つたきり別れ　潮花
切り貼りの障子ばかりで子が元氣　古詩郎
健康に育ち兄弟ながら征く　潮花
健やかな十六貫の胸をはり　彩泡
健康な子の書く文字は大きすぎ　鼓愁
健やかに育つ我が子へ手を合せ　古詩郎
いつも健康默つて動く男なり　三巴
一家みな達者揃つて稻を刈り　紫香
モッコを擔ぐ親子の顏の色　滿潮
健康に氣をつかひ出す歸還兵　孤篷
健康が今日もお櫃を空にする　龍成
（佳）父と子の健康母のまるき顏　鮎美
健康な母に利久が揃へられ　かほる
健康の顏一列にならぶなり　同
（人）健康の見本の樣に言はれてる　洋
（地）健康へ山は答へた朝の呼吸　鮎美
（天）健康になれとラヂオが起こに來　龍成

席題「驛　前」　綠雨選

驛前で逢ふ目印が見當らず　三巴
驛前へくる號外を取りかこみ　紫香
驛前のこんな處に虫の聲　鮎美
驛前の雜踏で友を見失ひ　翠芳
驛前へ來て父は無口なり　みのる
約束を待つ驛前へ灯がはいり　鼓愁
驛前へ來て財布を忘れたり　花笑
驛前に來てお土產を渡される　競舟
驛前で飲み友達に見付けられ　青兒
驛前でコースをきめる地圖を出し　默平
驛前の土へ降ろしたバスケット　同
驛前の風が家出の裾を吹き　かほる

席題「肩　書」　水客選

肩書が無闇にほしい二十才代　潮花
肩書もなく自宅もない名刺　水坊
肩書の多い女の色眼鏡　鼓愁
肩書を信じ切つてる手術台　龍成
肩書を持ち飛行機で支那へとぶ　豆秋
退職し肩書の名刺使はれず　翠芳
眞心の祝辭に肩書つけておく　水坊
肩書を先祖の墓に刻む音　鮎美
肩書の名刺の裏の女の名　古詩郎
肩書へ何やら物をきゝに來る　孤篷
肩書の手前應接間へ通し　彩泡
國防婦人會長となりいつも留守　豆秋
肩書のすごい名刺を突き出され　潮花
肩書をきつちり云うて司會降り　孤篷
肩書が出來て丸藥手ばなさず　滿潮
肩書を小さく讀んで祝辭とす　水坊
（佳）肩書の名刺を國婦つゝましく　鮎美
肩書をたくさんもつて上京し　豆秋
肩書のついた名刺も別に持ち　紫香
（軸）肩書をぬいでお通夜に來て吳れる　水客

兼題「障　子」　鮎美選

障子みなしめて秋の夜を語る　花笑
眼となつた障子の穴が恐しい　古詩郎
くすぼつた障子をぬはるランプの灯　潮花
すゞめチュッ〳〵障子に動く　豆秋
ギャマンの障子破つてくれてよし　滿潮
吾子なり障子破つてくれてよし　水坊
大輪の菊は障子の內に見せ　青兒
結局は我が家のものと知る障子　水客
障子張り一とこ猫の通ほるとこ　彩泡
台所の障子觸はれば暖かし　かほる
（佳）新しい障子へ柿の實が赤い　潮花
（軸）ふつゝかな娘障子をしめおはり　鮎美

雜川

廣島支部句會（廣島）

十月二十五日　大森風來子報

大掃除母には無駄なものがなし　俗善薩
無駄のない生活の中の葉雞頭　風來子
金齒ちら〳〵見せて冗談受け流し　俗善薩
四十なほ白粉臭い金入齒　同
おしるこへ金齒が痛むのをこらえ　風來子
見物と信心と行く團體車　灯竿
信心の眼に秋の雲春の雲　久米雄
御利益がないと信心さめかゝり　天國
信心はお伴の嫁が自慢なり　麥作
信心をする掌が美しい　九披
紅一點新體制に異議があり　伯峯
紅一點どなた樣にも如才ない　同
紅一點こゝへお出でと席を空け　俗善薩
紅一點お茶を飲むとこ見つめられ　久米雄
測候所うらめばうらむ程に濡れ　同
測候所あてにはならぬ傘を持ち　天國
隣組夫婦喧嘩も捨ておけず　伯峯
隣組砂糖を少し借りに來る　同
隣組空地へそばの花が咲き　久米雄

うちの子を走らせませう隣組　幽香里
隣組新體制に副ふ話　天國
明月や二合の酒に駈け廻り　三眛
背伸びしてからは聞く耳持つてゐず　風來子
豊作の秋が終つた日の背伸び　久米雄

川雑　**下關支部句會**（下關）　國弘半休報

腹立ちへそしらん顔で水を呑む　半休
しかられた後は涼しい顔で居り　關京
仲人に眞赤な顔で茶を運び　賢次
だん〳〵と鏡の顔が化けて來る　草路
いたづらが過ぎる子の顔黑い顔　市多樓
神様も賽錢箱へ錠を掛け　同
近づいた神社へみんなホック篏め　九呂平
大吉のみくぢに鳩も寄つて來る　十四夫
先頭の旗は鳥居をもうくゞり　水客
神社から見る世の中が美しい　市多樓
雪千古不二へ鎭座の宮柱　暢爺
大鳥居日本人としてくゞり　桃水
子の武運禱る拍手海に冴え　米三
現金は懷中にありよい天氣　白陽子
現金と寢て恐ろしい夢に醒め　不川
無意識に手をやる金の有り處　米三
現金は女房しつかり持つてゐる　草路
戸締りを妻にまかせて先に寢る　正晴
鍵固く固くおろして留守にする　柳月
合鍵を一本づゝの共稼ぎ　不川
日の出づる方へ平和の鍵預け　半休
海峽に浮ぶ勇姿は無敵艦　莞治
海峽を渡れば門司のステーション　莞二
海峽の風へ茶店は餅を賣り　水客
海峽に壽永の昔偲ばれる　湖月
海峽にきら〳〵一直線を引き　文福
海峽へ煩悶の石蹴つて見る　白陽子
海峽をつなぐ化學の底力　米三
海峽の船日の丸は晴れてゐる　桃水
ハーデンクロイズのドーヴァーを渡る日は近し　暢爺

川雑　**岡山支部句會**（岡山）　於　禁酒會館

十月十九日　鈴木九坡報

微熱さみしくカロリー表を繰り　眞理子
平熱に近く林檎の皮をむぎ　紫水
ぬいだ足袋きれいなこの日の微熱　四三坊
逆境は夕陽へあてもなく歸り　久米雄
生活の底に見守る一つの灯　蟻峰
逆境の根强さ春を待つこゝろ　ユリエ
人形は逆境もなく足が折れ　耕水
逆境の身へそよ風のやさしすぎ　洋子
逆境の父端然と坐る癖　千苦樂
逆境に子の素直さもいぢらしく　麗天樓
逆境の部屋一輪の薔薇白く　九坡
長女だけ素顔義理ある母と知り　市多樓
雪解けて山の素顔へ陽の惠み　素木
ほんとうの素顔ほんとの笑みを見せ　一二三
マッチ二本三本交叉點の風　風來子
すゝぼけたくらしの中の鐵の釜　信太郎
買溜の鐵裏庭で燃えてゐる　灯竿
無一文煙草を吸ひつくし　玄々洞
無一文舗道の蔭を選つて行き　九坡

川雑　**塗青支部句會**（大阪）　淺謙公報

十月八日

冗談を云つて苦勞の多いこと　博行
怒られて冗談ですと赤くなり　久
冗談の一つも云へる地位になり　謙公
純綿と大きく書いた札をつけ　同
純綿と聞けば純綿らしくなり　光路
純綿は兵隊さんに送るもの　香林坊
純綿と大きく書いて人を寄せ　京詩
約束の日に來て見れば貸家札　あつし
父と子と約束がある日曜日　よしみ
ソワ〳〵として約束を感づかれ　ライト
約束を忘れ父ちやん馬になり　香林坊

川雑　**豊中支部句會**（豊中）　耶馬溪吟行

十月二十日　丸尾潮花報

張板の母へ小使ひ貰ひに來　紫香
嫁入の荷へ張板の手を休め　水客
張板にかたみのかすり干してあり　紅多呂
張板へまだ〳〵嫁の手をかりず　潮花

なぎさ句會（大阪）

十一月九日　丸尾潮花報

信用がないのかあつさりことはれ　みのる
あつさりと云へば女のものたらず　潮花
ハイキング枝のまんまの柿をかひ　雪春
おとなりへ犬をあずけて歸國する　三羽
ブルドツク思ひがけないことにある　一笑
立喰ひの屋台の下に犬もゐる　綠翠
甲虫要塞戰の樣にゐる　水客
甲虫力一ぱいたゝきつけ　愁花
甲虫落葉の渦の上で死に　潮花
甲虫角をくくつて貰うてくる　一笑

川雑　**竹原支部句會**（廣島縣）　梶川芳郎報

十一月二日

電書鳩十字砲火の中を飛び　みづほ
技擢の椅子先輩にすまなくゐ　愛鳩
團參を鳩山門によけてゐる　芳郎
未亡人或日參拜に腹を立て　芳泉
十一月十五日
退職の手當を棒に振る短氣　芳郎
あきらめて失業手當開けてみる　芳泉
手當金受けて餘生の靜かなり　愛鳩
燒石に水と手當を笑合ひ　みづほ

川雑　**葉櫻支部句會**（大阪）　今西鼓愁報

夕月に案山子の影がのびてゐる　細泉
案山子かと思へば人のゐる小徑　鼓愁
へのへのの顔で案山子のまじめなる　潮花
急行のとまらぬ驛に二人づれ　清月
芝栗の置場にこまる滿員車　花笑
地藏さんと同じドイツの紋所　鼓愁
爆音の眞下ナチスの旗進む　潮花
月給は國民服もまだ買へず　美竹
團服で來れば課長のまだ若く　競舟
つぎをあてつぎをあて着る作業服　同

川雑　**四ツ橋支部句會**（大阪）　中内翠芳報

たばこ屋へ來て素見の氣が變り　翠芳
一の橋二の橋越えて瀧が見え　山人
子澤山多の靴下心配し　糸柳
靴下も非常時型に繼いで履き　翠芳
電報と聞けば驚く母であり　秀甫
電報を打つて嬉しい里歸り　壽堂
電報も打つて列車を待つばかり　坊風
電報に年寄の手がふるへてる　綠雨
電報を手に蔭膳へ向き直り　美奈子

川雑　**鐵道病院支部句會**（大阪）　於　水虹居

九月十六日　北川春巢報

足許にあはれくちなし眞白なる　水虹
足許の財布調伏とは知らず　春巢
大衆席足許何か蹴つた音　万的
足許の惡さ名刹まだ遠し　某人
性格の通りにのびた無精髯　幽香
男勝りとほめられてゐて不倖　嘘川
出戻りはその性格の相違云ひ　久枝
星月夜稻の穗銀のうねりする　食堂子
重慶を落贈させる米の出來　嘘川
豊作へ小學校の屋根低し　紫津
豊作のたより子供の名で知らせ　幽香
豊作へ肥えた雀を打つて來る　春巢
豊作へ神代のまゝの土に住み　久枝
豊作の鎌母の手に光るなり　同
豊作の田を旅客機で見て通り　春巢
豊作の村大臣を出した村　水客

川雑　**堺支部句會**（堺）　村上角堂報

十月二十六日

拜觀をして海軍が好きになり　白面人
十八だ男だ海軍志願する　富葉
アメリカが何を云ふかと海軍旗　豆秋
いゝ月に一機一機と舞上り　さくら
飛行機でとんで歸つた時の人　豆秋
重爆の音だと子供きゝわける　孤篷
父さんへ濟まぬと母はペタル踏む　逸水
母からの土產田舍で出來たもの　曲豆
點いてゐる灯りを母に案じられ　白面人
洗濯奉仕サン僕の猿又頼みます　武子
十一月十三日
蹄跡は蘭印迄も延びさうだ　角堂
牧場へ續く軍馬の品定め　露舍
我手柄知らずに軍馬土に歸し　貴志子
洋上の日の出だ水兵擧手の禮　同
兵曹長二十代でも髭を持ち　露舍
水兵に命令一下浪高し　神樂
水兵の目に領海の阿呆鳥　貴志子

よむだけの客と見ぬいた古本屋　葭乃
古本に誰が入れたか枯れ菫　角堂
古本屋漁り停年邪魔にされ　神樂
古本屋ふしようぶしょうに値を申し　葭乃

住友川柳會（尼崎）

十月十五日　橋本路風報

うかつに聞いた看護婦の年　峯助
助からぬ事を看護婦知つてゐる　毬夫
看護婦の買物籠が世帶じみ　雀二
毒マスクかけて看護婦頼もしく　哲郎
看護婦長少しゐばつた顔も見せ　四一
看護婦の足音聞いて布團きる　和郎
看護婦のもう大丈夫が氣にかゝり　覺榮
看護婦の和服の時は花もいけ　美知夫
こぬ友へ望をかけた告知板　尊風
告知板書きならべられてたそがれる　正路
告知板S子と書いてわかるらし　路風
身輕さは驛へひとこと書き殘し　辛雅
もうそんな季節かを知る告知板　哲郎
新體制うれしく中止聞く日なり　南濃路
新體制中止をせねばすまぬやう　路風
中止札内輪のものは知らぬなり　美知夫
又中止かとお得意のあらを言ひ　百千
默禱は汗の作業を中止して　毬夫
出張は中止二號が病んでゐる　南濃路

阪大川柳句會（大阪）

十一月一日　丸島利生報

歸朝寫眞檢閲濟の活字あり　栞
歸朝出迎へる洋裝に氣を遣ひ　春巢
新歸朝第一聲は子を殖やせ　楠水
青疊のことにふれてる歸朝談　栞
京城で歸朝第一聲を出し　春巢
歸朝待つ母はたんぜんまで縫うて　葭乃
歸朝して妻の尊さ見直しぬ　楠水
引き降す樣に歸朝の手を握り　芳一
獨身稅の土產話に花が咲き　方正
空襲の味も知つてる新歸朝　山彦
歸朝して床の間の軸變へて見る　春巢
歸朝した富座疊の踏み心地　同
歸朝して代用食と云ふを食べ　路郎
時の人となつて歸朝の華やかさ　同
こゝだけとことわつてゐる歸朝談　同

松坂倶樂部句會（大阪）

十月六日　石井白面人報

近眼鏡外して上げたいよい客色　美根子
色眼鏡スパイの樣に見返へられ　白面人
調印は眼鏡をかけてたしかめる　孤篷
爭へぬ年の眼鏡をそつと出し　生々庵
スキッチに生死をかけた急降下　美根子
ヒットラー世界のスキッチ握った氣　生々庵
ハウスキーピングとはスキッチひねる事　孤篷
横櫛に鱗模樣の仇姿　美根子
痛ましさ鱗四五枚落ちたまゝ　生々庵
鱗ついたまゝでざるから剩錢を出し　白面人
名物と云ふゲヂ鱗だらけなり　孤篷
氣の弱いくせに鱗の帶をしめ　路郎
慰問袋軍馬の前へ來てあける　孤篷
軍御用もう私の靑でなし　同
遙拜へ軍馬は頭しやんと上げ　同
白衣歸還軍馬の夢亦軍馬の夢　同
人馬一體あゝ泥濘を今日も越え　白面人
紙芝居軍馬の手柄一くさり　美根子
お國のためだ軍馬たしかにいなないた　生々庵
旗振るは生死を共にした馬へ　路郎
我が馬を殘した南支もう見えず　同

十月二十日

つき合うて見てから嫁にゆくと云ふ　生々庵
つきあひの將棋の駒の下し樣　美根子
門構へ鱗つき合ひ疎まるゝ　普天
天牛へ一緒に行つて何か買ひ　白面人
つきあひは好きだが五勺飲めなり　孤篷
知合だつきあひだ見榮ださあ金だ　指洋
尻つ尾を出さぬ修業がまだ殘り　生々庵
今更にしつぽかくせぬはめとなり　美根子
泥を吐け尻つ尾を出せと新體制　普天
母がまた尻つ尾を食べた芽出度い日　白面人
尾底骨一寸さわつてみたくなり　孤篷
尻つ尾をば包み切れずに電話賣り　指洋
裏ぎつた友は時めく實業家　美根子
友達は妻の知らない事も知り　普天
本持つて歸つたまゝで三月經ち　白面人
友達の前で防諜忘れかけ　孤篷
友達によつて返事の違ふ母　指洋
取立ての會費は妻に任せとき　普天
幹事だけ會費の外の酒をのみ　美根子
會費だけ持たせてやつてまだ案じ　白面人
筆等で會費をきめる鋤燒屋　孤篷

有恒川柳句會（大阪）

九月廿六日　寺井鋭々報

默々と茶漬濟まして壁を見る　鋭々
あゝ茶漬うまく喰へてる有難さ　同
修業は苦い冷い茶漬から　波夢造
茶漬でも食べなと旦那奥に入り　同
ぶゞ漬を妓器用に喰べ納め　青美
見た事も無い田を次男二反持ち　波夢造
浪人しても次男の席はきまつてゐ　青美
次男坊顚も頭もよいと言ふ　平三

十月十日

意見丈聞いて上役返事せず　波夢造
意見具申若さの熱を現はせり　同
いつの間や意見するよな齡になり　五遊
異見する前に執事はほめそやし　青美
代表意見何處へやらドアの外　同
末席の意見案外强硬な　鋭々
受賣の意見質問から剝げた　同
番號で人を訪ねる社宅街　波夢造
通達で社宅馬鈴薯植ゑさゝれ　同
生めよ殖やせよ社宅に子が溢れ　五遊
安いけどお辭儀の多い社宅なり　德二
二百坪三人家内社宅なり　同
社宅だから近所のラヂオ辛抱し　青美
上役の社宅應接だけ廣し　同
奉天だ社宅に社宅また社宅　同
社宅一角謠が聞こえ悲なし　鋭々
社宅から出る丸刈へ旗つゞく　同
賢夫人社宅に住んで貯金をし　行三

麻生川柳早鐘會（大牟田）

高田抱逸報

七人を抱へ悲愴な痩男　篠原
更生を誓ふヤクザの應召日　藤川
興太者も君に召されて見直され　竹下
應召でやつと男の顔がたち　一秋
あの男居候で居て虚勢張り　石貫
檢査官泣かす男の歎願書　梅春
張りきつた聲で男が產れ出る　山中
選ばれて慰問使となるちび男　初風
華と散る伴は男の手で育ち　龜水
女にも負ける意氣地のない男　抱逸
良い聲の女車掌へ乘り過し　某
ウソだとは思へぬ女の口車　十四之
女でも第一線の赤十字　直
料理屋のおかみ煙管で指圖する　北野

非特異性全免疫元
オムニコメンツト
本劑は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。
（適應症状等）
流感、各種肺炎、肋（膜）膜炎、肺扶膜炎、中耳炎、蓋膿腫、其他各科、急性、無性、炎衝性、傳染性、敗血性、並に化膿性諸疾患に對し奮乳に渉り著効を奏す。
（特長）
注射無痛、副作用絶無、用法簡單、奏効迅速、價格廉。
（包裝）
㊀ 二〇〇瓩入 二〇〇〇瓩入
㊁ 二〇〇瓩入 一〇〇〇瓩入
㊂ 一〇〇瓩入 一〇〇〇瓩入
一文獻呈
發賣元 株式會社黒田藥品商會 大阪・東京

後記

▼ことしもよく働いた。働いて働いて働らきぬいた。スリ減つてしまうんぢやないかと、東魚氏や省二氏に案じられたほど働いた。營利事業でこれほど働いたら儲かり過ぎて困まつてゐるだらうが、コチトラは闇の仕事には縁がない。二〇三號目を師走の街頭に送り出して、ホツト一ト息、尊い汗を拭くに過ぎない。

▼本誌の新體制は全柳壇の支持に應ふべく、新春號から一段と強化され内容の刷新と共に、型も四六倍判に革めた。期待を請ふ。

▼小山文三氏の「未知の弔問」は社會の裏を解剖して餘ますところなしだ

▼前田五健氏の「狸」は、とぼけた顏をして越年することとなつた。この「狸」をホテルのベツトで讀み耽つてゐる佳人のあるのもうれしい。

▼小畑自由朗氏の「愚談」は單なる愚談ではない。社會批判としての諷刺がある。「愚談」にしても「狸」にしても「貝釦」にしてもそれ〴〵のファンが出來てゐるのが愉快だ。

▼戸田孤蓬氏は「川柳ドイツ小史」のあとをうけて本號へ「川柳イタリヤ小史」を發表された。

▼我が社では大政翼贊・臣道實踐を朗らかに鼓吹仕樣と云うので、極月十四日に、すべて忠臣藏張りの「師走川柳大會」を開催した。二千六百年の佳歳を送ることとした。この日を期して川柳への復活組も入門組も來會されたい。

▼いつも編輯週間に入ると、手紙をもらつても返事をかくひまもない忙しさで、つひ失禮してしまふ。歳末に際し、一ト纏めにしてお詫びする本號からリリやアートが編輯に携はることとなつた。門前の小僧で、リリなごなか〳〵俊敏なアツシスタントだ。今日などは、もう用が濟んだやうな朗らかな顏で、椅子にもたれて、ブラツクキヤツトに頬づりしてゐる。(不朽洞編輯室にて路郎)

募集

第十八巻 第貳號課題 十二月廿日締切 (十句以內)

圖書館 麻生葭乃選
看護婦 北川春巢選

第十八巻 第參號課題 一月廿日締切 (十句以內)

教科書 塚越正光選
百姓 魚住滿潮選

第十八巻 第四號課題 二月廿日締切 (十句以內)

前金 藤本蘭華選
眼病 矢野虻の麿選

每號募集 (每月五日締切)

近作柳樽(雜吟廿句) 麻生路郎選
川柳塔 麻生路郎選
同舟近詠
各地柳壇(會報)
文章(評論研究感想吟行漫文漫畫)

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る。
▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。
▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事
▲文庫は二十字詰原稿紙使用の事。
▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事
▲締切は嚴守されたし。
▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

價定

一部 金三十錢(税一錢)
半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
一箇年前金(特輯號共)三圓六十錢

廣告料

本誌への廣告に就いては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○誌代受領は送本によつて御承知願ひます御註文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十五年十一月廿五日印刷
昭和十五年十二月一日發行
第十七卷 第十二號 (每月一回一日發行)

大阪市西區江戶堀上通二丁目四六番地
編輯兼發行印刷人 麻生幸二郎
大阪市西區江戶堀上通二丁目四六番地(昭和ビル)
川柳雜誌社
電話土佐堀 三三三三番 八一六三番 八一六四番
振替大阪七五〇五〇番

禁無斷轉載
本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

賣捌書店
(大阪) 參文社 三越書籍部 明文堂 朝日ビル書店 其他市內各書店
(東京) 東京堂 巖松堂 吉岡書店 玉森堂 紀伊國屋 三昧堂
(神戶) 米田賣文舘 (函館) 石塚 (京都) 三宅 (名古屋) 靜觀堂

社關係の人々 (いろは順)

主幹 麻生路郎

贊助員 池澤樂居 長谷川一徹 大道弘雄 岡本一平 片岡直方 笠原路生 嘉納純 田中長二 長崎柳秀 長岡半太郎 長野晴濱 藤村作 藤本卯之助 頴原退藏 淺田一 末弘嚴太郎

客員 鳥山一歩 沖野岩三郎 大島濤明 大谷五花村 龜井晟修 川上三太郎 川村花菱 米村あん馬 田村孝之介 谷脇素文 生方敏郎 高尾亮雄 窪田銀波樓 山本雨迷 安川久留美 前田雀郎 前田五健 柴谷宰二郎 篠原春雨 蛭子省二

不朽洞會員 藤里好古 森東魚 橋本綠雨 高橋かほる 福田山雨樓 西田艸樂 永田里十九 奥村丹路 岩崎柳路 寺井銑々 大西八歩 高澤一泯 戸田孤蓬 石井白面人 川出美根子 中島生々庵 上田耕二 戸倉普天 小畑自由朗

古川風竹 前山北海 古川霓花麗 岩崎山石 藤井友郎 米本貴志子 ★ 北山悟郎 水谷鮎美 姫田夕鐘 村松夢裡 市塲沒食子 吉田水車 妹尾八九滿 須崎豆秋 春元紀太 西いわを 後藤宵兒 宮岡白峰 石曾根民郎 中西おさむ

原本史風 正川水客 黑尾紫香 丸坂潮花 大橋形水 岩田双虎 岡田某人 岩崎松代 田中雨月 平佐平三 橋本波歩造 藤岡至藝瑠 增元翠陽 酒井斗風 天野卜居 北川春巢 布施筑川 小林橙舍 尾崎方正 佐竹香附子 押谷たけを 關根山彦

西尾一菜 多田波 櫻川不水 田中風葉 中原銑人 濱田久米雄 好崎申仙 杉原大研子 菊澤小松園 魚住滿潮 岩本雀踊子 清水友帆 松井円坊 石野秀雄 清水史路 清水白柳子 西川愁水 中内翠芳 多田市多樓 濱田賢次 森宗男 大森風來子 玉井彩泡 鈴木九坡

支部と幹事

道頓堀支部(大阪) 萬よし
函館支部(函館) 晟修
梅田支部(大阪) 鮎美
簸川支部(島根) 綠之助
鳥取支部(鳥取) 鐵州
松山支部(松山) 虻之麿
天王寺支部(大阪) 八九滿
鶴町支部(大阪) 双虎
御池橋支部(大阪) いわを
松江支部(松江) 山川兒
大鐵局支部(大阪) 水客
西條支部(愛媛) 英賀夫
城南支部(大阪) 申仙
今治支部(今治) 文庫
光笑會(大阪) 里十九
竹原支部(廣島) 芳郎
廣島支部(廣島) 風來子
名古屋支部(名古屋) 水車
豊中支部(豊中) 紫香
下關支部(下關) 半休
北鮮支部(清津府) 美笑
蒙疆支部(張家口) 柳路
上海支部(中華) 天作
鐵道病院支部(大阪) 春巢
葉櫻支部(大阪) 秀溪
四ツ橋支部(大阪) 翠芳
布哇支部(布哇) 霓花麗
堺支部(堺) 角堂
岡山支部(岡山) 九坡
尼崎支部(尼崎) 美知夫

福園

西子冬日 孝青

支那料理

名物 印度カレー

一階 食事と喫茶（椅子席）

二階 會食と宴會（日本席）

大阪天滿橋京阪前

福園

電話東二三八九番

安産のために

妊娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

片瀬醫學博士論「安産のために」冊子呈上

樹林醫學博士 推奨
片瀬醫學博士 監査

ワダカルシューム錠

大阪道修町 和田卯助商店

ガラス壜代用

紙容器

金屬代用紙罐

紙コップ

丸形・角形・小判形・組立式各種

藥品・食料品・菓子等の容器として最適

大阪市住吉區靖明町通一丁目四〇番地

二葉屋商店

電話事務所用 戎橋下天王寺茶屋四一〇一四番 二〇三四番

大正十三年三月三日 第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十五年十一月廿五日印刷納本 昭和十五年十二月一日發行

川柳雑誌

NO・20

(停) 定價金30錢 送料壹錢

SENRYU ZASSHI

Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

ニキビ

りとびきに

美顔水

蚤・蚊・南京虫等の
毒虫でカユい時！

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

▲ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の藥です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧！ゼヒお勸めしたい藥です！

▲定價一瓶四十錢・六十錢・一圓廿五錢。全國藥店にあり

ニキビ・吹出物に
ゼヒ此藥

阪大・京東
桃谷順天館